

---

# 王の剣士 2 「絶滅種」

雅

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

王の剣士2「絶滅種」

### 【コード】

N5880D

### 【作者名】

雅

### 【あらすじ】

【王の剣士】身の内に剣を宿す「剣士」。王国近衛師団の年若き剣士を主人公としたシリーズです。ノ第2話「絶滅種」近衛師団第1大隊に下された王よりの下命。それは東の辺境ミストラ山脈に棲む、ある種族の調査と保護だった。ノ（シリーズとしていますが、単体でもお読みいただけます。）

第一章（前書き）

シリーズ物ではありませんが、単体でもお読みいただけます。

## 第一章

### 序

石造りの家並みはどれも無残に崩れ、焼け爛れてあちこちで煙を上げていた。

周囲を取り囲む鬱蒼とした森を照らし出す紅連の炎の中に、赤子の泣き声が響く。

足音が近づき、瓦礫の中を覗き込んだ。

瓦礫の周囲には、炭化した幾つもの黒い影が倒れている。

男は燃え盛る炎の中に、無造作に手を差し入れた。

瓦礫に隠されるように埋もれていた包みを、ゆつたりとした腕が拾い上げる。

そこだけ炎が避けて通ったかのように、包みには焦げ跡一つ無い。布に包まれていた赤子は男の腕に抱きかかえられると、ぴたりと泣くのをやめて自分を覗き込む黄金の瞳を見上げた。

途端に瓦礫が最後の支えを失って音を立てて崩れ落ち、激しく炎を巻き上げた。

### 第一章

彼等は初めから、その厳しい地にいた訳ではない。

だが彼等の種としての弱さは、他種との競合の中で、次第に彼等をより過酷な地へと追いやっていった。

急峻な山肌、果実を結ばぬ木々、天を突く先峰に陽光は遮られ、大地の恵みは乏しい。

時に餓えて幾人も仲間を失い、それでもそこは、彼等にとって安住の地ではあった。

単にそこ以外行く場所を持たなかったとしても。

……一つの選択を示そう。

彼等はある手段を持っていた。

それは彼等の餓えを満たし、命を繋ぐ。しかも容易く。

それは、恵みをもたらすばかりの手段ではない。

どんな選択が最善か。

どの段階で、誰に答えられるだろう？

## 第二章（一）

一つの世界が存在する。

広大な世界は複数の国家に分かれ、絶えず大小の紛争がどこかで発生している、そんな世界だ。

未だ開拓されず手付かずの豊かな自然が世界を満たし恵みを与える一方で、その過酷さからも無縁ではられない。

人の世のような科学技術の発達はないが、自然界に満ちる力を活用、流用する術を知っていた。『法術』と呼ばれるそれらは、日常の生活に根ざすものから戦闘に利用される破壊的な力まで様々にあるが、基本的は学問や才能により得られ、全ての者が自由に使えるものではない。一般的に多くの者は、自らの足で歩き、手で作り、身体と力を行使して生活していた。

この世界には、一つの国の中にさえ数多くの種族が存在する。人と同様の姿を持つ種から半獣族、半鳥族、水棲族、多種多様な種があるいは種族ごとに村を形成し、あるいは主要な街に混在していた。寿命は種族により異なり、僅かに数年しか生きない種もあれば、中には永遠に近い時を過ごす種もある。

太陽は東から昇り、西へと落ちる。

夜を追うように朝は訪れ、そしてまた夜を迎える。

地を耕し作物を作り、石を削り組み上げ街を形成する。

食事をし、眠りにつき、笑い、泣き、怒り、嘆き、苦しみ、喜びを得ながら日々を生きる。

世界には、連綿と続く生きとし生けるもの達の営みがある。

ただ一つ。

世界に祈りの言葉はなく、祈りの為に合わせられる手はない。

この世界は『神』はない。

世界の中心部には最大の力と国土を有する王国があり、この世界

の中で最も長い繁栄と長期の安定を保っていた。その中心には、アル・デイ・シウム 『美しき花弁』と呼ばれる都がある。強大な力を有し、幾千もの時を生きると言われる王の居城のある王都だ。この世界はこの王が作ったと言われてもいるが、既に伝説の中にある、事実は定かではない

王の版図を北から南に旅しようとした場合、整備された街道を行っただとしても馬で五カ月、ほぼ半年を要する。

東に峻険ミストラ山脈、西に古の海バルバドス、南に灼熱の砂漠アルケサス、北に黒森ヴィジャが行く者の足を阻み、そこから先は数多くの小国が乱立し生まれては消える、争乱に満ちた土地が広がる。王国の四方を取り巻く生者を寄せ付けぬ酷地は、逆にそれら小国の侵入を阻む絶好の墨壁でもあり、それが王国が長期の安定を保っている大きな要因でもあった。

ただ四方の辺境のうち、古の海バルバドスには、王と同等の時を生き続ける海皇と呼ばれる存在が深淵の世界を治め、領土内ではありながら王国とは一線を画していた。

およそ四百年前、バルバドスとの間に大きな戦乱があり、百年もの長きに渡り、西方の辺境部は激しい戦乱に覆われた。双方共に多数の死者を出した戦乱は、三百年前に両国の間には不可侵条約が結ばれる事で漸く決着を見、以来大きな戦乱はなく、時折小規模な争いが発生する他は国内は安寧を保っている。

国内は王の統治のもと、四大公と呼ばれる四つの公爵家、十の侯爵家、及び九十九家の諸侯がそれぞれの領地を治めている。

国の政務を司るのは、大別して四つの機関に分かれる。

内政を司る内政官房、長は四大公の一角、北方公ベール。

治水、土地、生活を司る地政院、長は東方公ベルゼバブ。

財務、商工業を司る財務院、長は西方公ルシファア。

治安、軍務を司る軍部、正規軍の長に南方公アスタロト。

内政官房は他の三部門を総括、調整する役割も果たしている。

また正規軍とは別に、王と王城を守護する王直属の軍である、近

王の剣士2「絶滅種」

衛師団があつた。

## 第二章（二）

王都は王の居城を中心に、丁度円を描くように王城の周りを取り囲んで形成されている。王城に行くに従って各層ごとに高くなっていく構造になり、王都そのものが小さな山のように映る。最長部に高く伸びる尖塔は空に近づき、晴れた日には瓦や窓が陽の光を弾くのを、遠く離れた街からも見る事ができた。

王都の道には石畳が敷かれ馬車道と歩道とに分けられている。複数の階層を持つ建物が、壁や屋根、窓の枠の色調や、街全体の俯瞰に至るまで計算されて立ち並ぶ。場所によって街並みは複数層に分かれ、高い橋梁によって結ばれている地区も見られた。

全体を歩いて抜けようとすれば丸一日はかかるが、王都内の随所に法術による道が作られ、他の階層に行くのにはさほど時間を要しない。

所々に広場が設けられ、街の中を水路が王城を中心に放射状に伸びる。水路を小船で行き交う者たちの多くは商人達だ。当然の事ながら王都は、国内においてもっとも商工業が盛んで、特に商業は各地から街道を通って様々な品々が集まる。街には活気が溢れ、通りには深夜でも商売の屋台が軒を連ねていた。

街の外周には軍の演習場があり、更に先には数里に渡って深い森が広がる。その森を縫うように、街道が各方面に伸びていた。

王都の中心である王城もまた、幾層にも分かれた構造をしている。城壁と深い水を湛えた堀がぐるりとめぐらされ、王都の街並みと一線を画していた。城壁には東西南北、四つの「外門」があり、門を潜ると第一の層がある。

第一の層は兵舎で、王城の最端部を取り囲むように正規軍の東、西、南、北方四軍の兵舎がそれぞれの方位に広がり、及び近衛師団兵の宿舎もそこに位置する。

第二の層は軍の士官の屋敷が立ち並ぶ区域だ。

第三の層に行くには、さらに「中門」を潜る必要がある。そこには貴族諸侯の屋敷が並ぶ。諸侯はそれぞれの領地に居城を持つが、王都に上がった際にこれらの屋敷に居起している。

第四層は再び城壁に仕切られ、四方にある門が王城の「正門」となる。

その内部には広大な、美しく整えられた庭園が広がり、その庭園を抜けると漸く、王の居城が現われる。黒と銀を基調にした石を組んで造り上げられた、優美な線を描く数十の尖塔が、周辺から中央に向かつて次第に高くなりながら聳え建ち、見る者を圧倒していた。

王が実際に住まうのはその中央の一角で、そこを「居城」と呼び、それ以外は公的な役割を果たし、謁見の間や四大公の執務室、内政官房、地政院、財務、軍本部などの各部署があった。

一等参謀官ロットバルトは、空席のままの執務机に視線を向けた。少し、戻りが遅いか。

整った面を中庭へ面した窓に向ける。硝子を隔てた中庭は午前 of 明るい陽光に満ち、平穏な表情を見せている。

近衛師団第一大隊大将レオアリスと、その副将であるグランズレイが王への謁見の為に王城に上がってから、既に二刻が経とうとしていた。飛竜を使えば、王城とこの師団士官棟の間は、往復に四半刻も掛からない距離だ。

だが前の謁見が長引くことなど珍しくもないことで、途切れることなく行われる王への謁見は、一つの案件に対して半刻の時間も与えられないことはなく、下手な説明で時間を長引かせれば、謁見の間を出た時に、待っている他の諸侯達の厳しい批判の視線を浴びることになる。

近衛師団は王を守護する王直轄の部隊だが、大隊大将の地位ではさほど王に謁見する機会は多くはない。十日に一度の定例の謁見に

加え、時折急な案件が入った時くらいだろう。

レオアリスは王への忠誠が深く　　というよりも、ただ純粹に王を慕う気持ちが高く、王への謁見の前後はいつも嬉しそうだった。

ともかくその時は、ロットバルトが完璧なまでの説明資料を整えるのだが、今回は違った。

早朝、師団総將を通じて、王の召喚を受けたのだ。

「結構遅えなあ。」

クライフも空席の机を眺めて呟いた。クライフは第一大隊を組織する三つの中隊の中將の一人だ。左中右の中隊の内、中軍の指揮を執る。明るい茶色の髪と鶯色の瞳がその性格を物語っている。

「そうね。」

緋色の髪をかき上げて、左軍中將フレイザーも立ち上がり、窓の傍に寄ると、レオアリス達が帰ってくるだろう中庭の回廊を眺めた。王の召喚を受けて謁見に赴くことなど滅多にない。皆その案件が何なのか、気に掛かっていた。

「我々がじりじりして待たたってしかたないよ。お戻りになれば説明があるだろう。」

クライフとフレイザーに対して、右軍中將ヴィルトールは年長者らしく、いつもの穏やかな口調でそう言うと言通していた書類を閉じた。

「そろそろ演習場に行く時間だけど、どうしようか？」

午前中は各中隊の訓練が、王都円周部の演習場で行われるのが通例だ。

中將が毎回指示を出さなければ始まらない訳ではないが、定刻に姿を見せなければ、既に演習場に集っているだろう揮下達は何かあったのかと気を回しもするだろう。

ロットバルトは少し考えてから氷を思わせる蒼い瞳を上げた。

「もう少し待ちましょう。もしいずれかの隊に指示か下るようなら、ここに揃っていた方がいい。」

「そうだね。」

「何の用なんだろうな？早朝出仕前だろ、急ぎの案件か。」

「お前が最近、遅刻が多いからじゃないか？」

ヴィルトールが長い銀灰色の髪を揺らし、同じ色の瞳を向けて親指で首を掻く仕草をして見せると、クライフは陽気そうな顔を引きつらせた。

「アホか？んなもんわざわざ王が口出すかよ。」

「あら、師団の任免は王の勅令よー。この間の監査に引っ掛かったんじゃない？」

「ははは…んな。止めるって。大体それだったらこいつの方がずっと素行悪いだろ？」

冗談と分かっていたながらも、フレイザーにまで脅されて、クライフは苦し紛れにロットバルトを指差した。ロットバルトは椅子の背もたれに肘を掛けて寄り掛かり、冷めた視線を投げる。

「私の、どこが素行が悪いんです。」

「女関係。」

ロットバルトは男というには整いすぎた顔に、優雅に笑みを浮かべた。

「人聞きの悪い。友人が多いだけですよ。」

「てめエの友人は女ばっかか？！」

「ご紹介しましょうか？」

「え、マジ？…って、ふざけんな！」

「最低な会話ね…あ」

呆れ果てた色を浮かべていたフレイザーが、窓の外に視線を止めて執務室の扉を振り返る。二人が漸く戻ってきたのだと彼女の表情から見て取り、他の三人も席を立った。すぐに扉が開き、レオアリスとグランスレイが執務室に入った。

## 第二章（三）

大将であるレオアリスは、青年と呼ぶにもまだ若い。大柄なグランスレイの肩辺り程の細身の身体を、今は王への謁見に際して着用する正装に包んでいる。襟元の詰まった丈の長い上衣に肩から纏う長布、全身を統一している黒色は近衛師団を表す色でもある。

年齢は一六、七歳、近衛師団の中で最も若く、副将グランスレイとは、親と子程も年が離れて見える。

普段は明るい表情を浮かべる漆黒の瞳の中に僅かにある翳りに付き、迎えた中将達は軽い違和感を覚えた。

常ならば王に謁見した後などは、その頬の上には隠しても嬉しそうな色が伺えるのだが、今朝はどこか憂鬱そうに見える。

「遅くなった。ちよつと地政院に寄つてな。」

そう言うと、レオアリスは纏っていた長布を外して椅子の背に放り、身を沈めるようにして腰掛けた。束の間眼を閉じ考え込むように顔の前で指を組んでいたが、瞳を上げると前に立つ中将達を見渡した。

「ミストラに行く。」

「ミストラ？ミストラ山脈ですか？」

グランスレイ以外の全員が、驚いた顔をレオアリスに向け、その漆黒の瞳を見返した。

ミストラは王都から馬で約二カ月半を要する、東の辺境に連なる山脈だ。好んで訪れる者はほとんどなく、彼等にとつても険しく荒れた、無用の土地といった印象が強い。

そのミストラに、一体何の用があるというのだろう。

彼等の疑問の視線を受けて、レオアリスは前に立つグランスレイに眼を移した。

一つ頷き、グランスレイが慎重なまでの手つきで四人の前に差し出したのは、一通の書状だ。

その表面に捺されている紋章を眼にし、四人は息を飲んだ。たった一つ刻まれた、双頭の蛇の紋。

執務室に掲げられている近衛師団の軍旗にも、同じ紋があしらわれている。

黒地に暗紅色の徽章。

黒は王の直轄軍を。

暗紅色のそれは、王の紋を表す。

書状の表にはそれ以外何も印されてはいなかったが、それだけで、王の勅旨だと判った。

「これは…」

グランスレイはその書状を、一番近い位置にいるロットバルトに手に取るように促す。

ロットバルトが手に取るのを躊躇っていると、レオアリスが再び口を開いた。

「構わない。取れ。」

深く頭を下げそれを受け、ロットバルトは書状を開いた。三人の中将達も、横から覗き込むように視線を落とす。

流麗な字体が僅かに数行したためられている。直接眼にする機会は多くはないが、おそらく王自身の蹟によるものだろう。

それは、近衛師団第一大隊大将であるレオアリスに直接指示を下すものだった。

東の辺境、ミストラ山脈に棲む、ある種族の調査と保護。

書かれているのはそれだけだ。

ロットバルトが書状を閉じると、再びグランスレイが書状を取り、レオアリスに戻す。レオアリスは書状を机の上に置き、中将達を見渡した。

「ヴィルトール、ロットバルト。」

呼ばれた二人が、その場で姿勢を正す。

「ヴィルトール、右軍全騎をすぐに動けるように整えろ。」

「承知致しました。」

ヴィルトールが左腕を胸に当て、一礼する。再び姿勢を整えると、ヴィルトールは僅かに首を傾げてレオアリスを見た。

「サランバードには通達しますか。」

サランバードは正規東方軍の辺境軍が駐屯する街の名であり、その管轄下で行動する場合は事前に一定の作戦内容を通達するのが常だ。しかし、レオアリスは首を振った。

「状況に応じてその必要も出てくるだろうが、今はいい。アスタロトには了承を取ってある。」

ヴィルトールは再び一礼すると、今度は退意を告げて執務室の扉へと向かった。右軍の準備を整えるために一度演習場へ向かうのだろうヴィルトールの姿を見送ってから、レオアリスはロツトバルトに視線を戻す。

「ロツトバルトには、俺に付き合ってもらおう。」

作戦行動の図面を引くのかと思っていたロツトバルトは、秀眉を上げてレオアリスを見つめた。

「上將に？まさか貴方が直接行かれるのですか？」

「そうだ。先ほど王にお会いした時、直接指示は戴いた。」

「何故…」

疑問を口にしかけたロツトバルトを、レオアリスは片手を上げて制した。

「悪いが質問は後だ。今回の動きはグランスレイと確認してある。」

ヴィルトール達にはグランスレイから説明するが、ロツトバルト、事は急を要する。まずは旅装を整えて一刻以内にここに戻れ。…ああ、旅装は私服でいいぜ。」

「飛竜を？」

「頼む。そうだな…緑燐を二騎がいい。」

その言葉に、四人はレオアリスの顔に再び驚いた視線を向けた。

レオアリスの 大將級が騎乗する飛竜は銀燐、また師団の飛竜は黒燐と定められている。緑燐は民間で主に利用されている飛竜だ。

レオアリスの顔の上に視線を向けたものの、漆黒の瞳の中には違和感の要因は覗けない。ロットバルトは喉元まで出かかっているだろう幾つもの疑問を抑え、一礼した。

「飛竜は私が用意するわ。」

フレイザーに礼を述べてロットバルトが退出すると、レオアリスも席を立った。

「俺も準備をしなきゃな。グランスレイ、後を頼む。」

「承知しました。飛竜の準備が出来次第お呼びします。」

グランスレイの言葉に頷くと、レオアリスは黒い瞳に僅かに憂鬱そうな色を刷いたまま、物問いたそうな中将達の前を抜け、自らも旅装を整えるために執務室を出た。

### 第三章（一）

近衛師団は王を守護する王直轄の部隊であり、総将アヴァロンの元、総数は約四五百名、それぞれ一千五百名毎の三つの大隊に分けられる。

第一大隊から第三大隊までの各大隊は大将が率い、その中で更に三つの中隊、左中右軍に分かれ、中隊の下に一隊五十名の十の小隊が存在する。

参謀部は各大隊の大将を補佐する機関だ。隊の戦略、戦術の立案を担い、一等参謀官は中将、二等参謀官は少将の地位に相当する。

王を守護することが近衛師団の主たる目的とはいえ、王自らが戦場で指揮を取ることがまずあり得ない。その為、通常の任務である王城の警護に加え、近衛師団も正規軍とほぼ変わらない動きをしていた。

ただ正規軍を動かす際には、原則的に軍議を招集し、王によって正規軍將軍アスタロトに対し勅令を下すのだが、近衛師団は今回のように、火急の件について王からの勅旨を受け動くことが多かった。

近衛師団第一大隊大将、レオアリス。

二年前に行われた王の御前試合を最年少で制し、近衛師団へ配属されると、その後僅か一年程で大隊大将へと昇りつめた。

異例の出世には理由がある。

レオアリスは、『剣士』だ。

剣士とは呼称ではなく、自らの体の一部、主に腕などを剣に変化させ戦う種を指す。剣士一人で百の兵を抑えると言われるほど、高い戦闘能力を持った種族だ。レオアリスはその中でも、最高位の戦闘能力を持つと評されており、それは彼の有する剣からも伺えた。

通常、剣士は左右どちらかの腕に一振りの剣を持つが、レオアリスの剣は二対。その十三番目の肋骨に宿る。

種としてそれほど数が多くなく、剣を身に宿すという特性と戦場

における風聞のみが聞こえてくることから、一般的に剣士は殺戮者として恐れられることが多い。

「殺戮者」「切り裂く者」「戦う為だけに存在する種」

けれども巷で恐れられ、忌避すらされる存在と、レオアリスを直接印象付けるものは普段の彼の上には無かった。

黒髪に漆黒の瞳はありふれた色で、それだけではどこの出身とも知れない。意志の強い瞳には年相応の色を浮かべることが多く、言動も同年代の少年達と際立った違いはない。鍛えられているとはいえ細身の姿からは、彼が近衛師団の大隊を預かる大将であることも、ましてや剣士であることさえ、俄かには信じがたい程だ。

しかし、彼が剣士であること、そしてその地位に比して若すぎる年齢と、また民間出身であるという、そうした幾つかの要素が彼の立場を時に不安定にさせてもいた。それに根差した批判も少なくはない。それは彼を支える者達にとっては腹立たしくもあり、また懸案の一つでもあった。

ごく簡単な旅装だけを整え、ロットバルトは再び執務室へと向かった。

先程まで柔らかく感じられていた陽射しは高く昇り、この季節には少し早い夏めいた強い光を投げかけている。

街路樹の緑は鮮やかに色を纏い、まだ朝の涼気の残る空気は肌心地良く感じられる。土官棟の入り口をくぐると、外の陽射しと内部の影が視界の中に入れ替わり、思いがけない暗さにロットバルトは一瞬だけ瞳を細めた。

まだ冷えた建物内を真っ直ぐに抜けると、対面にある扉から執務室に面する中庭の回廊に出る。回廊に囲まれた中庭には飛竜が二騎、翼を休めているのが眼に入った。その脇に、既にレオアリスとグランスレイ、そしてヴィルトールが立っていた。

レオアリスと二言三言、言葉を交わすと、ヴィルトールは一礼し、回廊の入り口に向かった。ロットバルトが来ているのに気付いてチラリと視線を向け、軽く手を上げる。

「取り敢えず、後で会おう。まあ、私の出番は無い方がいいみたいだけどね。」

いつもどおりの口調ではあるが、その響きには僅かな緊張感がある。ロットバルトが頷くのを見て、ヴィルトールはそのまま横を抜け、士官棟の影の中へ消えた。その後姿を見送りながら、ロットバルトはたった一文のみだった王の書状の内容を思い返す。

右軍は第一大隊の左中右軍の中でも、市街地や森林部での包囲・侵攻を得意とする部隊だ。今回の任務に適していると思う反面、それほど重要な案件なのかという疑問も残る。

中隊は一隊五十名の小隊十隊からなる五百名規模の部隊だが、通常の作戦単位は小隊単位が主で、局地的な戦乱など中規模以上の作戦行動を要する場合でもない限り、中隊そのものを出すことは稀だった。

### 第三章（二）

考え込むように立ち止まったまま、ロットバルトが中央に立つレオアリスの背に視線を向けていると、傍らのグランズレイに促されてレオアリスが振り返った。ロットバルトの姿を見て呆れたような笑いを浮かべる。

「そうか、お前そういう服しか持ってないよなあ。」

何の事かと改めてレオアリスを見れば、簡素とはいえ上質の布で織られた上下に外套をはおったロットバルトに比べ、質の荒い麻の上下に被きの付いた上着といった、下町の者が着るような軽装に身を包んでいる。

ロットバルトは氷を思わせるその顔の上に、どこか可笑しそうな色を浮かべた。確かに、並ぶと随分と釣り合わせの悪い出で立ちだ。「しかしそうは仰られなくても、これ以外となると誂えなくてはありませんが。」

「こういうのは誂えるとは言わねえんだ。」

「そうですねか？」  
澄ましたロットバルトの顔を、レオアリスは仕方なさそうに見上げる。

ロットバルトは軍では珍しい程の高い家柄の出身だ。十ある侯爵家の筆頭に位置するヴェルナー家の次男であり、父ヴェルナー侯爵は内政官房の副長官を務める。

だが家柄を置いたとしても、ロットバルト自身剣技もさることながら、参謀官という職位からも伺えるように、非常に頭の切れる男だ。しかし整った容姿に加えあまり見られない金の髪は、必要以上に目を引く。

「私は不適任では？」

その事を指摘するように彼が蒼い瞳を向けると、しかしレオアリスは軽く笑いながら飛竜の手綱に手を掛けた。

「適任さ。隊を抱えちゃいないし、何より冷静だ。」

確かに位としては中将にあたるが、参謀官は固有の隊を持たない。それを身軽と言うべきかは判らないが、少しばかりの不在には困らないとも言えなくは無い。何よりレオアリスは、本来参謀官が補佐すべき大将であり、その点だけを考えれば適任不適任以前の問題だ。尤もロットバルトとしては、口ではそう問いつつも、自分が行動を共にすることは補佐的な意味だけではなく政治的な意味も持つとそう考えてもいた。

批判の眼を向けられる事も多いレオアリスにとって、ロットバルトが背景に持つものは言ってしまうえば都合がいい。尤も、レオアリス自身がそうしたものを望んでいるかは別の話だ。

それよりもこの若い剣士は、王の為に在りさえすればいいのだとそれだけを思っている節がある。

「まあいいか。案外それも役に立つ。さてと、行こうぜ。」

一人納得して頷き、ロットバルトが口を開く前に、レオアリスはさっさと飛竜に飛び乗った。レオアリスが慣れた手つきで手綱を引くと、風を立て、飛竜が翼を揺する。

「ヴェルナー中将。」

手綱に手をかけたロットバルトをランスレイが呼び止める。その顔に僅かな懸念の色があるのを見て、ロットバルトは眉を顰めた。「あくまで目立たぬよう心がけよ。それから、上將があまり無茶をなさらぬようにな。」

ロットバルトはランスレイの言葉に隠されているものを読み取るうとその蒼い瞳を向けたが、飛竜の上から掛かった急かす声に諦めて視線を外した。

事態は既に動き出している。説明は後でも先でも、ロットバルトの役割に特に大きな変化はないだろう。状況を見極め、レオアリスを補佐しろ、とそういうことだ。

「承知しました。」

頷いて、ロットバルトも飛竜に飛び乗ると、手綱を繰り、その翼

を広げた。

「ご無事で。」

グランスレイは纏っている長布を翻して青い草の上に片膝を付き、レオアリスの飛竜が飛び立つのを見上げる。飛竜は大きな羽ばたきの音を立て、濃い青色を広げた上空へとひと息に上昇した。

路上にいた幾人も兵達が緑鱗の飛竜が飛び立つ様を何事かと思える中、一旦近衛師団の第一大隊士官区の上をぐるりと旋回すると、レオアリスは飛竜の首を東に向けた。

王都には強い太陽の日差しが降りかかり、王城の影が黒く城下の街に落ちている。

上空から眺める王都は、尤も美しいと言われる。個々の建物は外観の色、造り、高さが調和を持って並んでいて、それらが幾層にも重なり王城を中心に円形に広がるその姿は、まさに「アル・デイ・シウム」と呼ばれるに相応しい美しさを持っていた。

飛竜は雲の少ない蒼天の大気を切るように、その上を飛んでゆく。緑鱗とはいえ、馬で五日かかる距離を一刻で飛ぶ飛竜は、広い王都の上を瞬く間に駆け抜ける。

慌しい出立と、軽微に過ぎる旅装、飛竜の鱗の色。中隊。

王の勅書に書かれていた内容は簡素だったが、言外に多くの意味が伏されているのだらう。ロットバルトは手綱を取りながら思考を巡らせた。

ミストラ山脈に住む種族

『アリヤタ族』

どこかで聞き覚えがあるような気もしたが、すぐには頭に浮かばないまま、ロットバルトは前方で飛竜を駆るレオアリスの姿を見つめた。

## 第四章

ジエビウスは憎しみを伏せた暗い面に押し隠して目の前の男に向けた。

肥えた短軀を品の無い装飾過剰な衣裳に包んだ、くだらない男だ。自分達の行為はこの不快な男の肉と数々の宝飾品に変わるのかと思つと吐き気すら覚える。

「最近では上納が少ないではないか。買い手がまだかまだかと矢のような催促じゃ。」

「しかし、先ほどでも申し上げたとおり、最近では数が減り、簡単には手にも入りません。」

ジエビウスの言葉を聞いているのかいないのか、男は卓上に山と並べられた料理の中から山鳥の焼いたものを掴み出すと、照りのある肉にかぶりついた。

滴る肉の油に胃の腑に落ちた不快感を押さえ、あくまで顔を伏せたままジエビウスは言葉を続ける。

「それに、もはや数自体が急速に減少しているのです。僅かなりと時を置かねば、手に入れることすらできなくなりましたよ。」

漸く男は油に汚れた手を止め、面倒くさそうに卓の前に跪いたジエビウスの上に視線を超越した。

「取れなくなつては困るよの。僅かとはいつまでか。」

「可能であれば、最低でも十数年の時間を」

皆まで言う前に左頬に鈍い衝撃とぴしゃりという音が走り、ジエビウスは口を閉ざすと、顔に当たって厚い絨毯の床に落ちた鳥肉の欠けらをじつと見つめた。

欠片の後を追うようにして甲高い声が耳を叩く。何を馬鹿な事を言うのかと、心底憤るように男は唾を吐き出した。

「貴様は能無しか！？数十年だ！？そんな価値の無い提案を賢しげにこのわしにしようとは、つくづく見下げ果てたわ！」

「しかし」

「もう良い。ではもう援助は無しだ。わしの親切心を仇にしおつて、あの辺境は貴様の能無しが餓えさせるのだ！」

どこまで、という言葉でジエビウスは怒りとともに飲み込んだ。

「領……」

「去ね去ね！貴様のような者は対価も払わずたかりと変わらん！そうじゃ、いつそ貴様の下の、ほれガストーンとか申したか、あの者の方がよっぽど気働きが良いわ！先日もある者は上納を寄越したぞ。」

憤慨してまくし立てる男の声に皮膚を叩かれながら、ジエビウスは床に付いた右手を反射的に持ち上げ、胸に当てた。

荒い布の下に固い感触を感じ、そこにある『力』に冷静さを取り戻し、再び手を下げる。

いつでも殺せる。だが、それでは困るのだ。

下げた両手を改めて床に付き、極力押さえた声でジエビウスは男を見上げた。

「ご無礼を申し上げました。何卒ご勘恕いただきますよう。」

自分を見もせず答えようとしぬ男に向かって、壁を前にするようにならぬはただ淡々と言葉を継いだ。

「すぐにでも、いくらかの品をご用意いたします。ご希望に添う数かはお約束致しかねますが……」

「ある限り持つてくるが良い。援助はそれからじゃ。」

「しかし、それでは今後の」

「貴様は命じられたとおりにすれば良い！」

再び投げられたガラスの杯を、今度は頭を下げる振りをして避けた。

液体の入ったままの杯は厚く絨毯の上で砕け、長い毛足を赤い染みで汚す。この杯も絨毯も、ジエビウスのような者では手に取ることすら出来ない品だろう。

だが当たらなかつたことに不快な表情を浮かべただけで、一向に

気にした様子もない男を暗い瞳で見上げ、ジェビウスは再び胸に収めた存在を意識した。

「五日以内だ！五日以内に定めのを量を収められねば、望みのものはやれん！よいな?!」

(生きる価値の無い男だ。)

意識の外に吐き捨てるように密かに呟き、ジェビウスは退意を告げると腰を屈めたまま、にじるようにして男の前を辞した。

扉が閉ざされ、冷えた石造りの華美な廊下を抜け、門を潜って漸く、ジェビウスは重しが取れたかのように肺に凝った腐った空気を吐き出し、暗い空を睨み付けた。

黒く煤けた雲が厚く不恰好に空を覆っている。早く街に戻らなくては嵐になりそうだ。自分の胸の内のようにだとジェビウスは独り笑った。

もう一度門と低い城壁、その向こうの館を振り返る。小さな領土の、城と呼べる程の規模もない矮小な館はあの男に相応しい。親から受け継いだものをただ漫然と食らい尽くしているだけの。

いっそ、手にした力で王に反旗を翻した方がまだ好感が持てるというものだ。

くだらない世襲制のお陰であんな男までが領主になれるとは、民の不幸の最大の要因ではないか。

王など、ただ命ずるだけで、民を顧みはしないのだ。民の不幸を知らず思いもせず王都で安穩としているのなら、王もあの領主も何ら変わりはない。必要ない。

痩せた頬を灰色の被きに隠し、ジェビウスは乗ってきた馬にまたがると、腹にあぶみを当て東を目指した。

(それにしても、ガストンめ。)

あれは勝手な商売をしているようだ。これ以上勝手な振る舞いをしないよう固く禁じなくては、最早その数は限りがあるのだ。

やり方を変えなくてはならない所まで既に来ているのは判っている。

だが、あの男から支援を引き出す今以上に確実な方法は、他に思いつかなかった。

貧しいあの街は対価となるようなものなど、何も持っていないのだ。

そしてまた、街に戻ったら命じなくてはいけない。それは彼等を…。

思考を止めようとする自分を敢えて嘲笑うようにジェビウスは無理やり言葉に出した。

「滅ぼすのだ。この私が。」

ジェビウスの目指す東方には、すぐ目の前にあるかのように、高く長く山脈が連なっていた。

## 第五章

彼は助けて欲しいと、そう言って男を見た。

男は薄暗い部屋の中で眼を見開いた。

湿った黴臭い臭いが部屋を満たしているが、既に慣れてしまった。強ばった身体を動かすとあちこちが悲鳴を上げる。

家族はどうなっただろう。妻と幼い子供は。

それを考えると恐ろしく、いても立ってもいられなくなる。

彼等は男のやってきた事を知らない。知ったらどう思うだろうか。

視線を転じた床の上に、夜目にも白いものが幾筋も散らばっているのに気付き、男は痛む腕を伸ばした。

毛足の長い純白のそれを一本摘み、目の前に持ち上げる。

『助けて欲しい』

男は小さく笑った。それは自嘲の響きを孕んで暗い室内に散る。

『どうか』

自分達は。

自分は、一体何をやってきたのだろう。

そんな事に至るまで、本当に何も考えて来なかったと言っただろうか。

恐怖に似た感情が身を震わせ、男は身体を抱え込むように蹲った。

『彼女は』

「やめてくれ、聞かせないでくれ。」

泣き声に近い響きで振り払うように呟く。

間に合うだろうか。

間に合わなければどうなるのだろう。

もう既に、一歩違えてしまっている。

「違う。」

既に、大きく違えているのだ。

男はもう一度、自らを嘲るように笑った。

笑っしか成す術がない自分を嘲り、低く笑い続けた。

## 第六章（一）

夜通し空を駆け、騎首を地上へと向けたのは、漸く空が白み始める頃だった。

王都を発ってから明け方まで、約一日休み無く飛竜を駆れば、馬で二月半はかかる辺境部まで裕に飛ぶことができる。

しかしレオアリスが途中で飛竜の速度を緩めた事もあり、現在地はミストラ山脈へはまだ幾分距離があった。左手の前方に影のようにミストラの尾根が聳えている。

昨夜は東の空に雷光が走るのを幾度か眼にしたが、群青と橙の交じり合った空はすっかり晴れ渡っている。

飛竜はゆっくりと旋回しながら降下し、街道から離れた林の中の空き地を選んで降り立った。草地の上に飛び降りると、レオアリスは伸びをして身体の強張りを取りながら、遅れて降りてくるロットバルトを見上げた。

ロットバルトが飛竜から降りる間に、飛竜の首に括りつけていた僅かな荷物を草の上に落とし、手早く飛竜の手綱を外す。

ロットバルトがそれに倣って手綱を解くの見届け、レオアリスは飛竜の首を軽く叩いた。

「もついいぜ、良く飛んでくれた。翼を休めたら戻れ。」

飛竜が小さく喉を鳴らし、疲れた翼を震わせる。すぐに飛び立つ様子はなく、ここでひと寝入りしようと思ったのか長い首を丸めて翼の間に差し入れた。

殆ど休息を挟まずに王都から辺境部までの長距離を飛行すれば、さすがの彼等も疲労は避けられない。

「上将？目的地には、まだ距離がありますが。」

レオアリスがすっかり飛竜を帰すつもりなのを見て取り、ロットバルトが問いかけると、レオアリスは荷物を拾い上げて肩に担ぎ、彼を振り返った。

「説明が遅れて悪いな。取りあえず乗騎はここで帰して、ここからは歩きだ。飛竜ではどうしても目立つ。運よく乗り合い馬車でも通ればいいが、歩くと丸々一日はかかるだろう。説明は 歩きながらする。体力の方は大丈夫か？」

「それは、問題ありません。」

「じゃ、行こう。急ぐ必要がある。」

一旦周囲を見回して方向を確かめてから、レオアリスは右手に見える林へと歩き出した。上空から見たところ、林を抜けた先に、東へと向かう基幹街道が走っている。

林を出て、街道に向かうつもりだった。

ロットバルトは歩調を速めてレオアリスの隣に並び、その手に持った荷物を預かると、頭半分ほど低い位置にある顔を見下ろした。

「お前、サンデュラスについての情報はあるか？」

不意に問われて、ロットバルトは東の間思考を巡らせた。サンデュラスはミストラ山脈の麓に位置する街だ。東の基幹街道から更に東南に逸れた場所にある。

「…基礎的な情報しか持ち合わせておりませんが、サムワイル男爵の所領する街ですね。サンデュラス自体は特に特色のある街ではありません。産業、商業ともに弱い。」

他の辺境部の街と同様に領事によって運営されていて、この領事は現在警備隊の長が兼務で任命されています。任免権者はサムワイル男爵になりますね。 目的地はサンデュラスですか。」

「そつだ。」

先程飛竜を降りた場所はサムワイル男爵領に入るわずか手前だ。

街道をあと半刻ほど進めば、その領内に入る。

「アリヤタについてはどの程度知ってる？」

「申し訳ありませんが、何も。」

「お前でもそつか。まあ、そつだろうな。」

特に気にした様子もなくそう言うと、レオアリスは僅かに考えるようなそぶりで口を閉ざしてから、再び前を向いたまま話し出した。

「あのミストラ山脈に住む半獣族の名だ。性質は温厚で戦闘能力は低い。山脈の奥で隠れるように暮らしている。あまり一般人の口には昇らない名だな。」

「それが…」

「その種が、およそ二十年前か、王により保護種に指定された。山脈に深く立ち入る事、アリヤタ族の村を探す事は禁じられ、違反した者の罪が重ければ、死罪だ。」

似たような木々が立ち並ぶ林の中を、レオアリスは時折足を止め、方角を確かめながら進んでいく。

次第に高く昇り始めた太陽が樹々の隙間から斜めに木漏れ日を注ぎ、彼等に方角を示している。

「死罪？罪が重ければ、とは。」

「アリヤタ族を捕獲し、内臓を取り出した場合さ。」

ロットバルトが思わずレオアリスの顔を見返すと、レオアリスもまた彼を見上げた。その黒い瞳には、再びあのどこか憂鬱そうな、複雑な色が浮かんでいる。

## 第六章（二）

「術士達の間では有名な話だ。アリヤタ族の内臓は、非常に貴重で高価な触媒として、高値で取引される。その為乱獲する者が後を絶たず、二十年前に王が勅令を出した時には、アリヤタ族は数千体いたその数を半数にまで減らしていた。集落もかつては山脈の各所に点在していたが、今では追われるように山脈の奥深くに押しやられた。」

王の勅令が出た後も、密猟は行われた。」

林が切れ、その向こうに東へと続く街道が現れる。

その果てに、蜃気楼のように目的の山脈が聳えていた。視界の中を左右に、どこまでもその両腕を広げ、目指す者を招くようにも阻むようにも見える。

レオアリスは一度睨むように漆黒の瞳を細め、山脈に視線を投げた。

「昨日、その警備隊から、アリヤタ族の現存数が百体を切ったと報告が入った。そこで詳しい調査と彼らの保護の為に、王の勅旨が下ったという訳だ。」

短い下生えの続いていた草地から、石畳を敷き詰めた街道に下りる。その上には何万回となく通り過ぎた馬車の轍が、溝のように刻まれていた。

「取り敢えず、俺達が山脈に着く頃合いを見計らって、右軍が付近まで着くだろう。暫らくは目立たぬよう周辺に伏せさせるが、必要であれば麓の街と山中を制圧する。」

「右軍全隊が動くのですか。」

その問いにレオアリスはあっさり頷いた。

そうなるのかなり大掛かりな行動だ。

レオアリスは必要とあれば、と言うが、事前に五百名からなる全隊を待機させるという事は、ほぼ、動かす必要があると、確信していることになる。

ロットバルトは再びレオアリスの上に視線を戻した。

「先ほど上將は、アリヤタの現存数が百を切ったと仰いましたね。非礼を承知で伺いますが、何故もう少し早い段階で対応されなかつたんです？今まで報告は無かつたんですか。」

「あつたさ。定期的にな。管轄は地政院だからな、詳しい事は分からないが、先の月にも報告が上がったばかりだそうだ。その時点の報告では、現存数は、千。」

千。半月の内に、それが十分の一に数を減らす？

ロットバルトは蒼い瞳を細めた。

「…今回の報告は、別口だと。」

レオアリスは満足そうな笑みを浮かべて、その顔を見返した。

「さすが、察しがいいな。昨日の早朝、警備隊の一人から地政院に書状が届けられた。アリヤタ族の実数と、隊内の腐敗の現状も添えてな。」

「腐敗、とは。」

「書状には、アリヤタを保護すべき警備隊自体が、賄賂を取って密猟を手引きしていると書かれていた。その真偽も確認事項の一つだ。その隊士とは今晚、一つ手前のカルドレって街で落ち合う事になつてる。」

カルドレの前から東南に街道が分かれ、分派したその街道を辿ると、サンデユラスの街に着く。

ロットバルトは再び思考を巡らせた。

警備隊はサンデユラスの街を守るための組織だが、その上組織は辺境地域を統括する、正規東方軍第七軍になる。

その辺境軍と都市の警備隊を結びつけるのが、サムワイル男爵のような、各地を所領する貴族達だ。

「サムワイル卿も関わりがある、とお考えですか。」

飛竜を降りた場所から考えれば、おそらくはそれも想定しての事だろう。そう考えて問いかけたロットバルトに対して、レオアリスは歯切れの悪い顔を見せた。

それも当然の事で、サムワイル男爵が今回の件に関わっているとすれば、事は一警備隊だけの問題に留まらない。

「難しいな。だが組織的であれば、関わってくる可能性は高い。…どんな奴だ？」

「そうですね…政治的な場での面識はありません。必ず年に一度、王への謁見の為に王都へは上がっているはずですが、特に悪い評判も聞いた事はない、とその程度ですね。」

地方の領主と近衛師団では管轄する範囲が違い、関わる事はほぼ無い。社交の場でも、ロットバルトの侯爵家に対して男爵家では、同席する事もない。

しかしこれである程度の疑念は解消された。ロットバルトは遙か前方に霞む山脈を眺める。

だがもう一つだけ、一番根本的な部分での疑問がある。

もし警備隊が密猟に絡んでいるのなら、この件に正規軍が絡んでいなかったとしても、王が師団に勅旨を下したのは判る。そして案件の大きさから考えれば、確かに中隊を必要とするだろう。

「しかし何故、近衛第一隊の大將たる貴方に、そのような勅旨が下されたのが判りませんね。話を伺っている限りの規模であれば、中隊のいずれかが動けば事が足りる。」

王が、敢えてレオアリスを指名した理由があるのだろうか。レオアリスは再び、その頬に憂鬱そうな色を掃いた。

「……一隊へ指示を下されはしたが、俺に行けとまでは仰らなかつた。王へは俺から願い出たのさ。もともと、術は俺の生活分野だったからな。それに俺にも、思うところがある。」

そう言って、レオアリスは口を閉ざした。空には雲ひとつなく、遮るものなく照りつける日差しの中を、ただ黙ったまま歩く。

その言葉は、ロットバルトには意外だった。

普段見せない表情から、王の命だからこそ、レオアリスにとって気乗りのしない今回の任務をこなそうとしているのだと思っていたからだ。

気鬱な色を浮かべながら、自ら望んで任に就いたのだと言う。何がその矛盾を生んでいるのだろう。

レオアリスが王都に上る以前の事は良く知られていない。北の地で、術を糧に生活している一族の出身なのだと、その程度だろうか。ロットバルトは以前何かの折に、レオアリスが口にした言葉を思い出した。

『王都に来る前は、結構術に自信があっただけだな。それで身を立てるつもりだったし。でも、来てみたら、俺みたいなのがごろごろ居るところか、その程度なんてほとんどいねエ。だからもう止めた。』

その時は単なる笑い話で、すぐに忘れてしまうほどの遣り取りだった。考えてみればそれ以外、彼自身がそうした話を口にした事も、ロットバルトが知る限りではほとんど無い。

レオアリスの、故郷。

北方のどこか、小さな、術士達の村。

ロットバルトは、山脈に視線を向けたまま黙って前を歩いているレオアリスの後ろ姿を見つめた。

アリヤタ族。触媒として取引される内臓。

術士達の村。

## 第七章

石造りの高い門の前に乗り付けた馬から飛び降りると、駆け寄った隊士に手綱を渡し、ジェビウスは開かれた門の奥に足早に入っていく。

さほど広くはない前庭にいた隊士達がジェビウスに気付いて敬礼を施す中、灰色の長衣の裾を蹴散らすようにして歩きながら、ジェビウスは声を張り上げた。

「ガストンはいるか！」

副官の名を呼ぶものの本人からの応えはなく、代わりに隊士の一人が素早く近寄る。

「奴はどうした。」

「今、街の見回りにいっておいでです。」

申し訳無さそうに告げる隊士の様子に、ジェビウスは眉を顰め密かに溜息をついた。見回りなどといったところで実際は、いつもの如く酒を飲みに行ったのだらうと苛立ちを覚える。不真面目なあの男が副官の位置にいるのは、領主が任命したからだ。

（その手法を、一度問い質してみたいものだ。）

苦々しくそう呟き、ジェビウスは領事館の扉を潜った。付き従う隊士に、ガストンが戻ったら部屋へ来るようにと伝えようと、階上にある執務室へ足を向ける。

階段に足を掛け、ジェビウスは一瞬だけ、その向こうにある廊下の奥に視線を投げた。

嗅ぎなれた臭いがここまで漂っているように感じ、口元を歪める。その臭いを嗅ぐ度に、既に前に進むしかない、強く思うのだ。

ジェビウスが執務室の椅子に腰かけて僅かもしない内に、おとないも無しに扉が荒っぽく開かれ、男が一人ずかずかと部屋中央へと入ってきた。自分で呼んでおきながら不快感を覚え、ジェビウスは椅子を返して入ってきた男を睨むように眺める。

「お呼びだろ。相変わらず不機嫌な面だねえ。」

明らかに酒に酔って顔は赤く、口調も少し怪しげな男。自分の副官であるガストンをもう一度睨み、ジェビウスは席を立った。「昼間から酒か。いい加減にしろと伝えてあるはずだぞ。警備隊の副官がそんな事で、街の者達の規範になれると思うか。」

ジェビウスの苦言をせせら笑うようにガストンは肩を揺らした。「規範かよ。警備隊が規範になっちまったら、あんたはちよつと困るんじゃないのか？」

「……」

「まあ安心しろよ、街の奴等は感謝いきりだ。何せ、俺達のお陰で暮らしてけるんだからな。奴等大して働きもしねえで、いい身分だよなあ。」

黙り込んだジェビウスを尻目に、ガストンは置かれていた長椅子にどかりと腰を降ろした。

「で、領主様は何て？どうもあんた、手ぶらで帰ってきたみたいじゃねえか。」

顎をしゃくってジェビウスの後ろの前庭に面した窓を示す。ジェビウスは溜息をつき、再び椅子に腰かけた。

「隊士達に仕度をさせる。幾日か入ってもらうことになる。十分な準備をさせるのだ。」

ガストンは一度ジェビウスの顔を眺め、それから喉を反らせて笑った。

「はは！領主様も切りがねえな！全部食っちゃったら後がねえつてのによお。」

「それもお判りだ。」

「本当かよ。」

問い返したガストンの顔は信じてはおらず、ジェビウスもまた領主がどこまで本当に理解しているのか、信じてはいない。

だが自分達は従うしかないのだ。領主の愚かしさを笑う権利も、実際には持っていない。

「しょうがねえなあ。けど今日は遅エ。明日の早朝に向わせるってことでいいよな？」

ジェビウスが頷くとガストンにはやにやと笑いながら立ち上がり、扉に足を向けた。ジェビウスの低い声が、追いかけるように引き止める。

「貴様、まだ勝手な商売をしているのか。」

振り返ったガストンの顔は、咎められた事を苦にした様子も無い。「ちよつとぐらいのご褒美は必要だろ？敢えて罪人になってやってんだ。」

「…もうその余裕も無いのだ。止める。第一、そこから足がつく事も考えろ。」

「言われなくても、もう店仕舞だよ。」

怒りを飲み込んで口を閉ざしたジェビウスに嘲笑うような視線を向けてから、ガストンは扉を開いた。入り口の柱に寄りかかり、にやにやと笑う。

「あんたもやつときゃ良かったんじゃないか？これから先、手があえるのかよ。」

応えないジェビウスを鼻で笑うように、ガストンは肩を竦めた。憤りを押さえるために視線を壁に逸らし、そこに掛けられた日付に気付いてジェビウスはふと眉を上げた。

「ジウスはどうした？」

生真面目な小隊長の顔を見ていない。日中のこの時間はジェビウスの近くに勤務しているはずだが、姿が見えなかった。

「ああ。　　嫁さんの具合が悪いとかで、昨日から休みだよ。」

ガストンはそのまま扉を閉ざして廊下へ消えた。ジェビウスは再び溜息を付き、陽の沈みかけた窓の外を眺めた。

橙と緋色に染まった空と、それを切り取るミストラ山脈の威容。

落日の緋に山肌を染め、街を睥睨するように聳えている。

明日、ジェビウス達の行う行為を、山は何を思っているのだろうか。

## 第八章（一）

陽は中天から、次第に西へと傾き、やがて王都のある地平線に消えた。

太陽が沈むと、空気は俄かに冷たくなる。山脈が近付いたせいもあり、時折冷えた風が草木を揺らして吹き過ぎて行く。

街道は左右に村や畑、牧草地などを覗かせながら、草原の上を延々と東に向かって延びている。

細い月が上がった頃に、二人は漸く目的の街に辿り着いた。街道沿いにあるこのカルドレという街は、王都から馬で二月近くを要するほど遠方にあり、どこか寂れた様子を漂わせている。しかし今は店じまいをしているが、門前の広場に並べられた屋台を見ると、日中は市も立っているようだった。

書状を出したミストラの警備隊士は書面の中でジウスと名乗り、この街に一軒だけある宿屋で落ち合う事を希望していた。指定された宿は、街の目抜き通りの中ほどにあった。

レオアリスは宿の前で立ち止まり、頭を覆っていた被きを背中に落として、錆びの浮いた看板を見上げた。

「ここだな。」

確かに看板には警備隊の男、ジウスの指定した名前が記されている。手紙にも宿はそこだけだと書かれていた上、他に通りには見当たらない。

レオアリスが扉を押し開けると、店内から思いもかけず明るい声が掛かった。

「いらっしやい。空いてるとこ適当に座んな。」

声を上げた店の者らしき娘が振り返り、入ってきた二人連れを一目見て、ぽかんと口を開ける。

扉から眺めると一階は食堂になっているらしく、店の中には幾つかの卓が置かれ、数組の先客がいた。大方が街道の行商人といった

風情だ。奥には帳場を兼ねた横長の卓が設けられ、その向うに厨房と、隣には階上への階段が見える。

「あの奥にするか。」

そう言つて奥の開いている席へと歩く僅かな間に、客の視線が宵も過ぎて入ってきた、どこか場違いな二人を追つて流れる。レオアリスは投げかけられる視線に構わず空いていた席に座つたが、周囲から自分たちを無遠慮に眺める視線に、ロットバルトは煩わしそうに眉を顰める。

「上将、席をずらしてください。じろじろと鬱陶しい。」

「仕方ないさ、身なりを変えても、お前ちよつと目立つからな。」

そう言いながらも、レオアリスは素直に席を移動する。ロットバルトは向けられる視線を断ち切るようにレオアリスの正面に座ると、彼らに背を向けた。

「私が、ですか。」

レオアリスは手を上げて給仕の娘を呼び、簡単な食事をいくつか注文した。娘は注文を取っている間にも、小さく口を開けてレオアリスと特にロットバルトの顔をまじまじと眺めている。娘が注文の品を告げに戻つた後、レオアリスは卓の上に肘を付いて、その手の上に顎を載せた。口の片端を上げる。

「こつという所じゃな。育ちの良さが一目瞭然だ。」

そう言いながらもレオアリスの表情には、どこかそれを面白がっている色がある。ロットバルトはレオアリスの言葉に、口元に小さく笑みを刷いた。

「まあ、育ちの良さは否定いたしませんか。」

「…」

手で顎を支えた格好のまま、レオアリスは乾いた笑いを浮かべた。「明日、店が開いたら服を変えますか。目立つようでは拙いでしょ。」

「別に構わない。軍という事だけ、ばれなければな。まあ、そうだな。お前が主人で、俺が従者つて事にでもしとくか。」

「冗談でしょう。」

ロットバルトは眉を顰めたが、レオアリスは少し面白そうだ。「だって多分そう見えるぜ。ま、ちょっと胡散臭いのは否めないが、この先は」

そこでレオアリスは口を噤んだ。店の娘が運んできた皿を卓の上に載せる。頼んでいない皿があるのに気付き、レオアリスは顔を上げた。

「これ」

「あたしの奢り。こんな夜遅く、腹減ってんだろ？」

ちらりと二人の顔に視線を走らせ、僅かに頬を赤くする。

「マジ？やりイ」

嬉しそうに顔を輝かせて娘に礼を言うと、代金を木の卓の上に置きながらレオアリスは娘を見上げた。

「一泊したいんだが、部屋は空いてるか？」

「あるよ。二階に二つと、三階にも。」

「じゃ、二階でいい。」

頷いて娘の告げた宿賃を更に卓の上に乗せると、娘はそれを数えながら、好奇心を押さえられないといった顔で二人を交互に眺めた。「兄さんたち、どっから来たの？」

「エザム。」

エザムは王都に近い、北の街道沿いの街の名だ。しかし娘は聞いた事も無いというように、小首を傾げた。基本的に交易に携わる商人達でない限り、街を出て旅をするという事は滅多にない。

「ふうん。遠いんだろうね。何、そっちのえらくキレイな兄さんは、あんたのご主人？」

ロットバルトは再び眉を顰めたが、レオアリスは軽く吹き出した。

「ま、そんな所だ。」

何かおかしい事を言ったかと、娘が二人の顔を眺める。

「変なの。あんたら商人には見えないよね。ねえ、何しにラカ！話し込んでんじゃねえ。」

「分かってるよ！」

店の主人の咎める声に、ラカと呼ばれた娘は首を竦め、名残惜しそうに卓の前を離れた。レオアリスがちらりとロットバルトに視線を送る。ロットバルトは立ち去りかけた腕に手を掛け、ラカを引き止めた。

「ひとつ、頼みがあるんですが。」

「な、なんだい？ かつたるい物言いだね。」

煩わしそうに言いながらも、ロットバルトが笑むとラカは真っ赤になって勢い良く頷いた。

「ここに、ジウスという男が泊まっているでしょう。彼と会う約束をしているんです。呼んで貰えますか？」

だがラカは首を傾げてロットバルトを見つめただけだ。

「誰だつて？」

「ジウス。サンデユラスからきた商人ですよ。」

「いないよ、そんな奴。今日泊まっているお客さんはあそこのひとたちだけだし、サンデユラスのひとはいないもん。」

ロットバルトとレオアリスが眼を見交わすのをみて、不満そうに頬を膨らませる。

「ほんとだつて。台帳だつてあるんだし、嘘言いやしないよ。宿はうちだけなんだ。ほんとにうちで待ち合わせなのかい？」

「判ったつて。なら、遅れてるのかもな。」

言い募る娘の言葉を手を上げて宥めながら、レオアリスは視線を周りの卓に走らせた。ラカの声は大きく店内の隅にまで聞こえただろうが、反応する様子を見せた者はいない。

「もしジウスって奴が来たら、部屋に寄越してくれ。深夜でも構わない。」

「分かったよ。」

娘が戻ったのを確認して、ロットバルトは声を低くしてレオアリスの顔を見つめた。

「来ていないと考えるべきでしょうね。サンデユラスからこの街な

ら、徒歩であつても我々より早く着く。」

レオアリスが卓の上に肘を付いたまま、手の中で頷く。名を偽つて止まっていることも考えられるが、そうであれば確実に落ち合うために、この場においても良さそうなものだ。

「今晚様子を見て、現われないようならどうされます。何らかの障害があつて来る事が出来なかったのか、それとも手紙自体が偽りか。」

「偽つたとして、誰に得がある？」

「常識的に、得をする者はいないでしょうね。…待ちますか。」

「…いや、来なければより悪い事態を想定した方がいい。予定どおり進もう。」

もう一度、レオアリスは店の中を見渡した。嫌な感覚が背を這い上がる気がして、小さく頭を振る。

「まあいい、取り敢えずせつかくの飯が冷める前に食おうぜ。」

道中は一度軽く食事を口にしただけで、空腹は既に絶頂に達している。卓に肘を付いていた身体を起こし、自分の前に置かれた湯気の立つ皿に手を伸ばした。勇んで一口口にし、レオアリスはびたりと動きを止めた。

有体に言えば、それほど美味くはない。というよりは。

「…これ、東方独特の味付けてやつか…？」

「違うでしょうね。」

レオアリスの疑問というか希望を、ロットバルトはあっさりと断じた。

「…じゃ、個人の味覚好み云々つてよりも」

「純粹に、料理人の腕でしょうねえ。」

レオアリスはがっかりと肩を落とした。育ち盛りで質より量とはいえ、この味はきつい。非常に塩辛いというか。ロットバルトなど食べる気もしないのではないかと顔を眺めれば、意に反して顔色も変えずに食事を進めている。

「意外だな。」

ぼそりと呟いたレオアリスに、ロットバルトは視線を上げた。

「何がです？」

「いや、食ってるのがさ。」

「まあ確かに、こうした味は食べつけてはおりませんが、ここでこれ以上を期待しても仕方ないでしょう。身体を動かす為の資源と考えれば味など二次ですよ。」

事務的な評価でそれはそれで彼らしいと、レオアリスは思わず笑った。

「そういや、師団の食堂でたまに食ってるもんなあ。」

「あそこはそれなりにいい味をしますよ。」

「へえー。」

レオアリスが何だかんだと匙を止めているのに顔を上げ、ロットバルトは口元を笑いに歪めた。

「他人の事は構わず食べなさい。任務の一環とお考えになればいい。」

「任務かよ…。辛え…」

苦業に近いと頬杖を付いて皿を眺め、それからふと思いついて、ラカが奢りと言って出してくれた皿をロットバルトの方へ押しやっ

た。  
「やろう。お前のが背え高いし、量いるもんな？」

「遠慮します。私より貴方の方が今後の成長の為に必要でしょう。」

「…遠慮すんな。女からの贈り物にや慣れてるだろ？」

「生憎、それに関しては食傷気味で。」

「…何だそりゃ…」

どこまで本気なのかは判らないが、ふと上げた眼にラカの興味深そうな顔が映り、仕方なくレオアリスは皿を引き寄せ匙を持ち直した。よくもまあ他の者達が文句も言わずに食べているものだと思改めて眺めれば、彼等が口に行っているのは簡単なつまみと酒ぐらいだ。

（ やられた。）

根拠もなく口の中で呟き、レオアリスは漸く諦めて食事を再開さ

せた。

独特な味付けは、慣れてくれば意外と悪くはない、かもしれない。

## 第八章（二）

部屋に入り荷物を置くのもそこそこに、レオアリスは寝台の上に寝転がった。

歩き続けた足を軋んだ音を立てる寝台に投げ出す。

ほぼ一日近くを飛竜で駆け、更に早朝から晩までを歩き通せば、いかに日頃訓練で鍛えていようときつい事に変わりはない。大きく開放の息を吐いたレオアリスを眺め、ロットバルトが苦笑を洩らす。「近衛師団の大将とは思えませんね。」

ロットバルトは外套を脱いで壁に掛けると、対面に置かれた寝台に腰かけた。

「俺が大将なんて、ホントは柄じゃないだろ。周りも何考えてんだかなあ。」

ロットバルトの言葉に、レオアリスは寝台に寝転がったまま可笑しそうに瞳を上げる。少し鬱いでいた顔にいつもの彼の表情が戻る。「少将くらいが一番気楽だった。」

「少将に、貴方のようにふらふら好き勝手されても迷惑でしょう。直接的な迷惑が掛からない分、今のお立場が適していると思いますか？」

ロットバルトは涼やかな笑みをレオアリスに向けた。

「ふらふら……」

ものすごい言われようだ。

「多少上が危なっかしい位の方が、下が責任を自覚しますしね。」

「…俺、一応上官なだけだ。」

「承知しております。」

疑わしそうに向けられたレオアリスの視線を、ロットバルトはさりりと受け止める。

尤も、レオアリスのような突出した能力を有する存在は、組織の中間や下部にいれば却って組織を混乱させる。軽口で言った事では

ないが、大将位にある事は、必然でもあるだろう。ロットバルトが近衛師団に入った時は既にレオアリスはその地位にあったため、経緯は判らないが、おそらくそうした思惑はある筈だ。

それに、実際は部下の心を良く捕らえ、また最高位の剣士という存在は、隊の誇りを十二分に高める。第一大隊の中で、彼を大将に戴く事を不満に思う者はいないだろう。

「まあ、自覚しておられるなら、今後少し行動を慎まればいい。」  
レオアリスは渋い顔で視線を逸らせた。

「それに、大将位だからこそ、王に拝謁される事もできるでしょう。」

不服そうな頬を、僅かな、けれど確かな喜色が覆う。その子供の様な喜びの色を認めて、ロットバルトは口元で笑った。

レオアリスがそうして王を慕うのが、何に根差しているのかは判らない。

グランズレイは、レオアリスのこの様子は彼が王都に上がった頃からずっとだったと言うが、近衛師団であつても中将位までは、王に近く拝謁する機会など滅多にない。年に数回行われる王の御前演習や謁見の儀などの折に、遠くから姿を眼にするくらいだ。

ロットバルトも師団中將として王に拝謁した事はなかった。レオアリスは大将に任ぜられてからは王に拝謁する機会を得ているが、それでもまだ直に言葉を交わす事は少ないだろう。

けれど彼の良く見せるこの嬉しそうな表情は、純粹な憧憬に近いものを感ぜさせた。

部屋の壁に掛けられた燭台の炎が、ちらちらと夜の影を揺らす。宵の口が過ぎてもまだ階下には騒めきが満ちていたが、少しくすんだ緑色の硝子に包まれた頼りない蝋燭の灯りは、逆に室内に喧騒が入り込むのを防いでいるようにも思える。

ロットバルトは寝台に腰を降ろしたまま暫く黙っていたが、その眼をレオアリスに向けた。

「今日一日、色々とお聞きしていますが、もう一つ、伺つてもよ

るしいですか。」

王に見通せないものなど無いと言われる。

冷徹な黄金の瞳は、遍くその版図を睥睨する。

今回のこの件を近衛師団に下命したのは、何らかの意図があつての事だろうか。

では果たして王は、レオアリスがそれを望むと予測した上で、この件を第一大隊に降ろしたのか。

「何だ。」

普段とは違うレオアリスの表情。それがどうしても、ロットバルトの心に引つかかっている。

日中、街道を歩いている間に色々と推測して一つの理由が頭に浮かんだが、所詮は推測に過ぎない。任務として行動する以上、疑問は解いておく必要がある。

それがレオアリスにとつて、あまり好ましくないものであつてもだ。

「貴方が術士をされていた頃、アリヤタ族の内臓というのは、既に高価なものだったのでしよう。それを見た事や、或いは扱った事が、もしかしたらあるのかと。」

レオアリスは一度ロットバルトの顔に瞳を向けてから、ゆっくりと逸らせた。階下で一瞬、喧騒が大きくなった。

「見た事はないな。」

声にはどこか平淡な響きがある。

「その価値は知っていたが、俺の村では扱っていなかった。生息地は遠く離れてたし、王が捕獲を禁じた事も知っていた。何より、頭の固い長老達でな。断固として許可しなかった。」

そう言うのと身を起し、壁に寄り掛かつて座り直す。懐かしそうに眼を細め、何かを思い出すように暫く口を噤んでいたが、再び口を開いた。自嘲気味に笑う。

「だが俺は扱うべきだと、思っていた。金になるからな。」  
立てた片膝を抱え込むように腕を回し、顎を乗せて燭台に視線を

注ぐ。蠟燭の灯りは薄い光を部屋に投げるだけで、レオアリスの表情ははつきりとは見えない。無意識なのか、首から下げた銀の鎖の先の、小さな青い石の付いた飾りを右手で握り込む。

「村は小さくて貧しい。薬草の採取や時折来る使い魔を創る依頼なんかで、細々と生活してる。しけた村だ。：お前、見たら眼を疑うぜ。」

そう言ってもう一度笑う。だがロットバルトは笑いもせず、蠟燭の微かな明りに彩られたレオアリスの顔を見つめた。

「冬が長くて、一年の半分が雪の中だ。お陰で作物も大して育たない。：こんなしけた村で、何を大義名分を翳してるのかつてな。他がそれで豊かになっていくのを尻目に、自分達だけは貧しさに耐えるのか？　ばからしい。数が少ないなら、ほんの少しでも。」

それだけでいい。そう言って長老達に詰め寄った。」

「それで」

「頭を冷やさせられたよ。たつぷり。七日間は納屋の中だ。」

再び寝台の上に寝転がり、後ろに組んだ両腕に頭を乗せる。そうして何かを追うような瞳を天井の暗がりに向けた。レオアリスの瞳には煤けた天井の代わりに、彼が育った北方の村の風景が投影されているのだろうか。

「まあ、俺にとって重要だったのは本当はそんな事じゃなかった。」

俺がどうしても変えたかったのは、あの村の貧しさだ。冬になり、作物が取れなくなれば、日々の食事にさえ事欠く。それなのにあの貧しい村は、ただそれを受け入れて生きていた。俺にはそれが、我慢ならなかった。　笑うなよ、ガキだったんだからな。」

その頃からそれほど年齢を重ねていそもない上官を見て、ロットバルトは口元に笑みを浮かべた。

「笑いませんよ。」

レオアリスは胡散臭そうにロットバルトの顔を睨んだ。

「　　第一、私はどうこう言える立場でもないでしょうしね。」  
そんな現実には、ロットバルトにとっては単なる言葉だけの世界で

しかない。そしてまた、そうしたものを手に入れようとするのは、特に何の不自由もなく生きている、そうした者達の方なのだ。

飢えの為に命を落とす現実などとは無縁の場所では、ロットバルトに限らず誰もが、ただ与えられるもの、手に入るものを当然として生きている。例えばそれが、禁じられたものだとも知らずに、手を伸ばしてきたものの中にはあつたかもしれない。

だがもし、知っていたとして　　自らそれを禁じただろうか。それを完全に否定しきれない事に、ロットバルトは微かな苛立ちを感じた。

「貴方が、罪を感じる必要はない。」

レオアリスは自分の育った村の貧しさを、変えたかったのだと言った。その為に他のものを犠牲にする事を厭わなかった自分を今、恥じている。

それが今回、レオアリスを動かした理由なのだと、漸くロットバルトは納得した。

だがおそらくはそれ以外に、今回の件に関して、自分を含めてそれに関わる全てのものに関して、遣り場の無い苛立ちを感じているのだろう。

それははつきりと所在の掴めない苛立ちだ。解決するため、どこから手を付ければいいのか、それすら掴みにくい漠然とした問題。「…もういいよ。寝ろ。明日はまた、日が昇る前から歩く。昼ごろにはミストラの麓に着くだろう。」

レオアリスはそのまま眼を閉じ、ロットバルトに背を向けた。

## 第九章

木々の間を足音が走る。

深い闇を幾つもの松明の灯りが過ぎる。

彼は遠くへ逃げるつもりだった。妻と子等が隠れている場所とは逆へ。なるべく遠くへ。

彼等だけは、何としても、どうあつても生き延びさせなければいけない。

右手の木の影から男が二人飛び出す。慌てて方向を変えた。白い毛に包まれた長い尾が跳ねる。

「いったぞ、捕まえる！」

視界の先に別の影が躍り出る。彼は地面を蹴り、斜面に突き出した岩を駆け渡り男たちの頭上を越す。

土に降り立ち再び駆け出そうとした彼の目の前に、白い固まりが落ちた。瞳が驚愕に見開かれる。

『！ラー！』

高く叫んで白い毛並みに包まれた、小さな身体に駆け寄る。べつとりと赤い血に濡れ、すでに事切れた身体を、震える腕が掻き抱いた。

男達が悠然と彼の周りを取り囲み、地面に蹲った姿を見下ろした。「テムエだけ逃げようなんて、大した根性だよなあ。ガキは恨んでるぜ。」

「お前も馬鹿だな。隠したつもりでも、ガキがぴーぴー鳴くからすぐ居場所なんてわかつちまう。」

喉の奥から低い唸りが漏れる。犬に似た鼻面の上に皺が刻まれ、牙が剥き出される。

だが男たちの武器の前に、それは余りに力なく見えた。

赤い瞳が、一人の男が手に提げた袋を捉え、大きく見開かれた。袋は大きく膨れ、布に赤い血の染みが浮き上がっている。

言葉にならない苦鳴が、アリヤタ族の男の口から押し出された。

「置いて逃げ出すのが悪いんだぜ。」

にやにやと、さも可笑しそうな薄笑いを浮かべた男達を、怒りと絶望、悲痛の混ざり合った瞳が睨む。

「自分達が何をしたか、解っているのか!? アリヤタは滅ぶ。」

アリヤタの絶望の叫びにも、男達はまるで感じるものも無いように、薄ら笑いを覗かせている。

「知ったこつちゃねえよ。」

「おい、滅んじまうなら価値が跳ねるんじゃないか?」

「よし、もつと吹っかけようぜ。買う奴はいくらでもいるんだ、言い値だよ。」

笑い声が満ちる。奪われた命と、遠くない先に奪われようとしている命。

消えていく種族の火。

笑い声が満ちる。

「貴様等…」

その声は、喉の奥で力なく震えた。

何故だ。何が悪かった？

自分達はどこで間違った？

苦しみから逃れようとせず、木の皮を喰んで生きれば良かったのか？

笑っている。

何故だ。

彼らが今、手にしているものは。

あれは、アリヤタの未来だった。

混然とした思いを全て叩きつけるように、アリヤタの男は吠え、白い身を翻して飛び掛かった。

## 第十章

朝になっても、ジウスの現われる気配は無かった。レオアリスの黒い瞳の中に、翳りの色が浮かぶ。

「仕方ない、行こう。」

もし来た時の為にと、宿に言伝だけ置いて、二人は宿を出た。

昨夜は暗くて判らなかつたが、ミストラ山脈は既に街の東を阻むように、高く目前に連なり聳えている。山脈の尾根から湧き出したかのような厚い雲が、空を塞いでいた。

街の門へと歩き出そうとした時、抑えた声が掛けられる。振り返ると、路地の陰に中壮の男が立ち、二人を素早く手招いた。昨日宿にいた男達の中に見た顔だ。

レオアリスが歩み寄ろうとするのをロットバルトは一度止めたが、それを手で押さえて男に近寄る。男は二人が自分の方へ来るのを見て、更に数歩、細い路地の奥に退った。

「何の用だ。」

レオアリスが問うと、男は誤魔化すような笑みを浮かべる。

「あんたら、サンデュラスの商人と会えたのかと思つてな。」

ロットバルトが傍目には分からない程度の、警戒の色を蒼い瞳に浮かべる。男の眼に少しの間視線を注いでから、レオアリスは首を振った。

「残念ながら、会えなかつた。」

「なるほどなあ。」

男は一人納得したように頷くと、二人に意味ありげな視線を向けた。

「何だ？」

「…今はものが少なえ。分かんたろ？」

「何の事だ？」

レオアリスの瞳に浮かんだ光が鋭さを増す。男はその光に僅かに

たじろいだが、浮かべた笑みを崩さないまま両手を軽く広げた。

「とぼけても無駄無駄。わざわざサンデユラスの奴と商売するなんて、目的は一つしかねえよ。忠告しといてやるが、一般にや知られてなくなつて聞く奴が聞きやあすぐ判る。」

「別に軍に突き出そうつてんじゃ無い。ただ、せつかくエザムからはるばる来といて手ぶらで帰るんじゃ、商売上がったりだろ。ま、おたくら商人風にも見えねえから、単に道楽かもしれねえがよ。…街に直接行けば、もしかしたら手に入るかもしんねえ。」

「…どこで。」  
「教えてやんなくもねえが…」

そこで言葉を切り、右手の掌を上に向け、親指と人差し指の二本の指を軽く弾く。レオアリスは小さく溜息を吐いた。

「場所と、店なら店の名前。幾らだ。」

「そうだなあ。場所で十、店の名で五。銀貨でな。」

銀貨十五枚といえば王都でも中流の住民達のひと月分の稼ぎに相当する。レオアリスは話にならないというように大きく息を吐いた。

「アホか。確認も無い情報に誰がそんなに出すかよ。合わせて五。」

「十四。その後ろのキレイなのは金持つてんじゃねえのか？見たところ、十五なんてそいつの着てる外套一枚にもならねえぜ。なあ。」

男は探るような目つきでロットバルトに顔を向けたが、レオアリスはそれを無視して短く言葉を告げる。

「六。」

「…十三でどうだ。」

「六。たった二言喋るだけでそれだけ入るんだ、十分美味しいだろ。」

「十二！」

レオアリスがただ肩を竦めて譲る気の無い事を見せると、男は大げさに息を吐いた。

「ちつ。…先払いだ。」

突き出された男の掌の上に、取り出した銀貨六枚の内、三枚だけ  
を乗せる。

「ガキのくせにしつかりしてやがんなあ。 鍵屋通りのエ  
ルロイって店に行ってみな。そこなら金次第で、ま、ほぼ確実に手  
に入る。」

受け取った硬貨を懐にしまつて男が路地を出るのを見送り、レオ  
アリスは重い息を吐いて路地に寄りかかった。視線を上げた先には、  
灰色の空が見える。

「あんなのが多いのか。思った以上に流れてるな。」

真偽はともかく、ここまで簡単に情報が手に入るのは、決してい  
い傾向ではない。アリヤタ族の内臓の密売が、想像以上に容易く、  
一般化している事をも意味する。

「一件一件上げてても埒が明きません。根元を押さえればそこから張  
った根を伝える。まずはサンデユラスに向かいましょう。」

頷いて、レオアリスは壁に預けていた身体を起こした。

## 第十一章

押し潰されるような空の下を隊士達は山脈の奥へと向かった。

呼吸が塞がったような苦しさを感じ、ジェビウスはよろめくように窓を開き、露台へと出た。張り巡らされた苔の茸く手摺りに掴まり、上体を支えて大きく息を付く。

ただ、もっと気分が悪くなるものかと思っていたが、予想に反して冷静だった。

ジェビウスは顔を上げ、階下の小さな中庭を眺め、警備隊の敷地を高く張り巡らされた壁を眺め、そしてその向こうに広がる街を眺める。

ぐるりと顔を巡らせれば全てを見渡せてしまうほどの、小さい街だ。

寂れて煤けたような灰色の街並み。活気はなく、まるで廃墟のように感じられる。産業も無く、大地の収穫も薄い。昨年の秋も殆んど実りはなかった。

年々減少していく収穫がジェビウスの心に焦りを募らせているからこそ、ジェビウスは今、自分の行ってきたこと、これから行われることに苛まれずにいられるのだ。

「そうだ、この冬は死者が無かったではないか。」

支援を受けてから、飢餓の為に命を落とす者達は辛うじて無くなった。だが、収穫はそれ以上に減っている。前の秋は支援が無くては街全体が冬を越せないほどだった…。

「支援があるからこそ、この街は生き延びられているのだ。」

正しいやり方とは言えないかもしれないが、選択の余地は無かったのだ。

けれど、以前より街の住民達は無気力になってしまったのではないか。

配給で命を繋ぐ事ができるようになった今、辛い畑仕事や労働を

好まなくなつたように感じられる。

「ごくりと喉が鳴った。だが乾いた喉は潤わない。

「そんな事は……」

浮かんだ考えを打ち消そうとしたが上手く行かなかつた。

ひどく喉の渴きを感じたまま、ジエビウスはのろのろと身体を返し、部屋に戻ると台帳を収めている棚へと向かった。年毎に商益や作高を記してある台帳だ。

震える手が何とか硝子を嵌め込んだ扉を開き、数冊の台帳を掴み出す。完全に掴み切れず、取り出した革の冊簿はバラバラと床に落ちた。

束の間、ジエビウスは引つ繰り返つた革の表紙とそこから覗いている記帳の数字を眺めていたが、弾かれたように屈み込むと、手に触れた年から勢い良く台帳を捲り始めた。

この数年を比較するように、並べた記帳面を交互に忙しく視線を走らせる。

次第に、ジエビウスの唇から呻き声が洩れた。

僅かずつ、一年毎に見ただけでは判らない程の数値ではあるもの

の。

支援が始まるのに反比例するように、全ての数値が減少し続けていた。

## 第十二章（一）

峻険、ミストラの尾根に阻まれて、東の街道はその役割を終える。山脈は至る所に切り立った壁面を覗かせ、剥き出しの岩に所々張り付くように擦れた樹が生えている。主要な街道から逸れたこの街、サンデユラスも、元々は山脈を越える旅人のために、宿場として設けられたものだ。

しかしミストラを越えればそこは地図無き荒涼とした大地が広がり、敢えて険しい山を越えようという者は皆無に近い。

唯一とも言える山中への登り口のすぐ手前に、石造りの家々が大地にへばり付くように建てられ、荒廃した空気を重く纏っていた。

建物の灰色の壁は煤け、今日の曇天の空と、街の向こうに聳える幾重もの山脈に圧迫されるように、全体が寂れ、縮こまって見える。

ロットバルトは被きの下から街の様子を手早く見回し、横を歩くレオアリスに視線を向けた。

「組織的に売買を行っているとしても、利益が街に還元されている様子はありませんね。それよりも、街の活気自体が感じられない。」

その言葉どおり、大通りにまばらに店は出ているが、それすらこれまでの街道沿いの街に見られたような屋台組みの店は少なく、多くは路上に布を敷き、或いは籠を置いて商品を並べているだけだ。

無気力な街、と、印象はそれだった。

どこか荒んだ空気の中、ぽつぽつと店を並べる寂れた様子に眼を向けながら、二人は通りを抜けていく。

日中だというのにそこを歩く者すら少ない。旅人が珍しくないのか、それとも無関心なのか、店の奥に座る住民達は二人が通り過ぎるのを暗い目つきでただ眺めている。

王都から遠く離れ、取り立てた産業もない、商益とは無縁の街。

この街を領封する領事館も名ばかりで、本来在るべき領事は、警備隊の長が代わって務めていた。警備隊の長は領主により任免され

た者がその任に就くが、隊士達の多くは地の者ではなく、近隣から集められている。

辺境のさほど重要性の高くない街では、こうした形態が取られることが多い。その分任務に対する意識が薄いのは、仕方のない事だとも言えた。

それだけが全てと言ってしまえるものではないが、荒廃と貧困、それに根差したものが今回の原因になっていることは否めない。

「警備隊の詰め所となっている領事館は、通常街の中心部に造られます。おそらくここも同様でしょう。だからと言って、直接尋ねていつて問い質しても、まともな答えは期待できませんね。証拠を掴まなければ話になりませんが…。ジウスを探しますか。」

「そうだな…」

ジウスを探すにしても、確実な当てはない。まさか警備隊士を捕まえて尋ねる訳にもいかない。

レオアリスは暫く考え込むように通りを眺めていたが、またすぐに歩き出した。せっかく支払った情報料を無駄にすることは無い。

「まず、例の店を探そう。」

時折細い路地を覗き、壁に示された銅版の通り名を確認していたが、何度目かにあの商人の言った路地を見つけて入り込んだ。

暫く歩くと、突き当りの建物の前で立ち止まる。寂れて今にも崩れそうな外観をしていて、傾いだ看板には男の言った名前と、宿と記されているものの、ロットバルトにはとても客を泊める場所とは見えないようだ。

「…ここに、お入りになるんですか？」

「そんな顔すんな、この奴らに見られたら反感買うぜ。」

「生憎、育ちがいいもので。こんな所が存在するなど、想像した事ありませんでしたよ。」

レオアリスは宿の扉にかけた手を一旦下ろし、呆れた顔でロットバルトを見上げた。

「お前、時々殴りたくなるな…。まあいい、中に入る前にその顔は

止める。ついでに、お前はしゃべらなくていい。お前がその調子で口を利いたら余計な揉め事になりそうだ。ただでさえその格好、ここじゃ浮くからなあ。」

「残念ながら。」

「…たく…ま、それでいいんだけどな。」

一人納得したようにそう言うと、再び扉の取っ手に右手をかけた。軋んだ音を立て扉を押し開くと途端に複数の笑い声が耳を打った。開いた扉に気付いたのか、声はさっと静まり返る。薄暗い中で幾つかの顔が、一斉に入り口に向けられた。

カルドレの宿と同じように一階は酒場になっていて、昼間だというのに酒瓶を抱えた男達が四人、円卓を囲んでいる。荒んだ視線がこの場にそぐわない来訪者を上から下まで眺める。

ひゅうつと高く口笛が鳴り、男達は顔を寄せて小声で二言三言交わすと、再びどつと笑い声を上げた。

「よお。」

男達を気にする素振りもみせず、レオアリスは慣れた様子で奥に進むと、店と厨房とを分けている壁から張り出した横長の卓越しに、店主らしき男に声をかけた。

ロットバルトもレオアリスに従って店に入り、男達の様子をそれとなく眺めながら長机の前に置かれた丸椅子に腰掛ける。

いでたちはてんでばらばらだが、四人とも腰帯に長剣を差しているのが見える。薄笑いを浮かべたまま、男達が二人に視線を投げた。

「ここはお前のようなガキが来る場所じゃない。帰んな。」

初老の男は、レオアリスを見もせず煩わしそうに手を払った。

レオアリスは動じず、卓の上に左腕を乗せる。

「よく言われる。ま、しょうがないだろ？どんな仕事も選べるが、年齢ばかりは選べない。」

「…何の用だ。宿か？宿なら表通りにある。」

「だから。そこじゃ用が済まねエから、こんな為りでわざわざここに来たんじゃねえか。」

そう言つと懐から一枚の銀貨を取り出し、卓の上に投げた。

ロットバルトはレオアリスの手馴れた遣り取りを呆れたように眺めていたが、銀貨の音に円卓を囲んでいた男達の目の色が変わるのを捕らえると、僅かに手を動かし、外套に隠した剣へと近づける。

「すげえ、こりゃ銀貨か。お前、何者だ。」

「俺というより、金はそのお方が出してんのさ。物好きな方でね。」

男達は納得したように、ロットバルトをじろじろと眺めた。

この為にわざわざ、こういう場所で浮く自分を同行させたのだからかと、ロットバルトは心の中で溜息を吐いた。

更に言えば、外見だけ取ってみれば、二人とも軽視されこそすれ、警戒されることはほとんどないだろう。男達は全く疑う様子が無い。レオアリスの声が低くなる。

「秘術が、お好みだ。」

椅子を蹴立てて、男達が一斉に立ち上がる。

「このガキ……ッ」

「おっと、騒ぐのは止めてくれ。あんたらにしても、俺達にしても、騒ぎは全くありがたくない。そうじゃないか？」

その言葉に眼を見交わし黙り込んだ男達の目の前で、レオアリスは懐から小さい袋を取り出して卓に落とした。硬貨のずっしりとした音が、暗い店内に響く。

「どこで手に入るか、それだけでいい。」

初老の男は呆然とした目つきで硬貨の入った袋に手を伸ばしながら、レオアリスとロットバルトを値踏みするように交互に眺めた。

「…今はない。最近は、モノが不足しててな。」

レオアリスの眼が僅かに細められる。

「いつならいい。」

店主はにやにやと薄笑いを浮かべ、首を傾げてみせた。

「ちっ。欲を張ると為にならないぜ。あと一枚。」

そう言つてレオアリスが取り出したのが金貨であるのを見て、店

主の顔が驚きと喜びに引き攣った。

レオアリスの指が金貨を跳ね上げる。とっさに伸びた店主の手を押さえ、目の前で金貨をチラつかせた。

「あ、明日だ。今、仕入れに山に入ってる。明日になれば、どっさりここに届くさ。ほとんど最後の品だ。加工にやちよいと時間がかかるが、何、大した日数はかからねえよ。あんたらは運が良かったな。」

一瞬レオアリスは顔を強張らせたが、そのまま金貨を店主の手中に放った。店主は手に取った金貨を眺め回し、大切そうに懐にしまい込んだ。二人の遣り取りを固唾を呑んで見守っていた男達が、一気にざわめく。

中心人物らしき男が立ち上がり近づくと、卓の上に手を付いて店主に顔を近づけた。

「おい、エルロイじいさん、まさか独り占めする気じゃねえだろうな。誰のお陰で無事に商売してると思ってたんだ。」

自分の隣の椅子に腰掛けた男の顔に、レオアリスが視線を向ける。「どう分けようとあんたらの勝手だ。けど、明日になってこの警備が立ち入るなんて事はないんだろうな。」

そう問うと、エルロイは金を数えながら意味ありげな薄笑いを浮かべた。

「警備ねえ。警備ならそこにいるぜ。自己紹介したらどうだ、ガストン。」

驚いて振り向いたレオアリスの顔を見て、円卓にいた男達がどつと笑い声を上げる。

「おいおい、バラすなよ。辺境軍にタレ込まれでもしたらどうするんだ。」

卓に座って、エルロイの手元の硬貨を一緒になって数えながら、ガストンは店主と顔を見交わす。

「ご同僚だ、そんなことしねえよ。なあ。」

ガストンの言葉に、レオアリスは凄惨とも言える笑みを口元に刷

いた。それを、男達は満足したための笑いだと勘違いしたようだ。再び騒がしい笑い声が店内に響いた。

「しない。安心しろよ。」

一旦男達をぐるりと見回して、再び卓の奥に視線を戻す。

「だが、こいつらはどの程度なんだ？いざって時に役に立つのか」  
どつと笑い声上がる。

「お前の隣のが、副隊長様だよ。役に立つどころじゃねえ。」

「…へえ。そりゃ、すげえ。警備隊まで絡んでるとは、驚いたぜ。」

レオアリスが口元に浮かべているのは笑みではない。怒りだ。今にも剣を抜きかねない程の怒り。

それが何故この男たちに伝わらないのか、その事がロットバルトには不思議だった。

自分達の行為が非難されるべきものだとは、露ほども疑っていない。

いや、それは既に、この男達の間では、日々の生活に磨耗され、感覚を無くしている。もしここで二人の立場と目的を明らかにしたとして、彼らが納得して事が丸く納まるということはあり得ないだろう。

レオアリスは一瞬だけきつく眼を閉ざした。

「明日、また来る。」

椅子から滑り降り、ロットバルトを促して扉へと向かう。それ以上声をかけられる前に、騒々しい音を立てる扉を閉ざした。

大またに大通りに向かって歩くレオアリスの後を追いかけて、ロットバルトはその隣に並んだ。

「上将。今の男達を抑えますか。」

「いや、それより先に本隊を抑える。」

レオアリスの声に、どこからか微かな鳥の鳴き声が答える。レオアリスに常に付き従う使い魔だ。

レオアリスは見えない使い魔に向かって、サンデュラスの近隣に伏せさせた右軍への指令を、低く素早く伝えていく。

「軍を山中に進め、制圧しろ。制圧に入る前にサランバードに一報を入れる。」

ロットバルトは瞳を鋭く細めた。

正規東方第七軍の駐屯地、サランバードに動きを伝えるという事は、この時点から事態は公然のものとなった事を意味する。

そして公然のものとなった以上、王の命が無い限り、師団の行動を妨げるものはない。

「一小隊は警備隊の本部へ回せ。俺達もまずは本部へ向かう。…行け。」

姿の见えない羽ばたきが一瞬間こえ、すぐに掻き消える。

大通りに向かって再び歩き出そうとした時だった。

「なあ。」

幼い声がかけられ、ロットバルトの外套の裾が引かれる。眼を向けると、そこにいたのは数えで十にも満たない少年だった。

## 第十二章（二）

薄汚れたボロ布のような服を纏い瘦せこけたその少年は、振り返ったロツトバルトを見上げた。

「兄ちゃんたち、術士さんだろ。」

「…ああ。」

「なら、買ってくれよ。いいもんがあるんだ。」

ロツトバルトは傍らのレオアリスにちらりと視線を走らせた。レオアリスが眼だけでそのまま話を聞けと促す。

「買って、何を。」

「こつち。付いてきて。」

そう言つて素早く走り出すと、少年はすぐ手前の家と家との細い路地に入り込んだ。後を追いかけて路地を曲つたが、すでに少年の姿は見当たらない。

足を止めて薄汚れた路地を見渡していると、入り組んだ家の二つ先の角から、先程の少年が顔を出した。

「こつちだよ。」

大人が通るには狭い路地を進み角を曲がると、そこにはすぐ背後を山脈の斜面として申し訳程度の空き地があり、木を組んで造られた隙間だらけの小屋が一つ建っていた。

その場にいた五、六人の子供たちが顔を上げる。全員が少年よりも更に幼い。一様に薄汚れ瘦せこけたその姿に、二人は思わず足を止めた。

空き地の奥には小屋に隠されるように、石で組んだ窯のような物があり、上部に設けられた煙突からは白く細い煙が途切れる事無く上がっている。

少年は小屋に入り、程なく何かを大切そうに抱えて戻つてくると、包んでいた布をそつと開いた。そこには掌より少し大きい、黒い塊が載せられている。

「これが…」

燻されて艶やかな光を帯たそれは、一見しただけでは炭のようにしか見えない。

レオアリスは黒い瞳をきつく眇めた。

アリヤタ族の内臓から造られた、触媒。

少年は声を潜めて、ロツトバルトを見上げる。

「こっそり隠しておいた、とっておきだよ。ここで燻してるんだ。店で売ってるものよりも上物だぜ。買ってくれる？」

「何故、俺に？」

「だって金持ってそうだもん。あの店に入ったって事は、こいつがいるんだろ？あの店より絶対安いよ。銀二〇でいいからさ。」

安すぎる金額に二人が驚いた顔を見交わすのを、少年は高いせいだと勘違いしたのか、慌てて言い値を下げた。

「じゅ、十五とかでもいいよ。でもこれ以上は下げないからな。十五でギリギリなんだから。」

市場価格は、その軽く百倍は降らない。だがこの子供たちは、それすら知らないようだった。

おそらくあの店の男達は、ここで子供らに取ってきた内臓の加工をさせながら、それをただ同然の値段で買い取っているのだろう。

背後でゆっくりと煙を吐き続ける古びた窯。真っ黒に汚れた衣服と手足。

「…悪いが、買う事は出来ない。」

ロツトバルトの代わりに、レオアリスが答える。少年は不満そうにレオアリスを見上げた。

「何で？金無いかよ。じゃあ、幾らだったらいい？」

レオアリスが僅かに唇を噛み締め首を振ると、ひどくがっかりした様子で頂垂れた。

「なんだよ、ちえっ」

それから、思いついたように再び二人を見上げた。その瞳にはどこか怯えたような光がある。

「あ、あのさ。兄ちゃんたち、いい人そうだから、オレ声かけたんだ。これのこと、あの店には言わないでいてくれる？」

「ばれたら困るのか。」

「殺されちゃうよ、オレ。」

手にした包みを握り締め、少年はぬかるんだ足元に視線を落とし、裸足のままの足が、泥に塗れている。

レオアリスが周囲を見回すと、手を止めてじっと自分たちを見ている子供たちも、皆一様に怯えたような顔をしている。

「分かった。言わない。」

子供たちはほっとしたように息を吐き、ようやく明るい笑顔を見せた。ロットバルトはその場をレオアリスに任せ、今入ってきた路地の入り口に戻るとその壁に寄りかかった。

「お前達、ずっとそれを作って暮らしてるのか？」

「そうだよ。大人はやりたがらないんだ。どうせ食い物は領事さんところで貰えるからさ。」

「食い物？領事館で食料を配ってるのか？」

少年の言葉にレオアリスは眉を潜めた。領事館で食料を配給するというのは、非常時以外にあまり聞いた事は無い。そもそも配給しなければいけない事態になっているとの情報は王都ではなかった。

ロットバルトを振り返ってみても、彼もただ首を傾げただけだ。

飢饉か災害か、いずれにせよ、王都へは情報が伝わるはずだ。しかし子供は気にした様子もなく頷いてみせる。

「うん。でも、オレたちはあんまり貰えないし、だからこうやって稼いでんだ。オレなんか、うんと小さいときからやってる。だから結構腕がいいんだぜ。」

得意そうに見上げてくる少年に、レオアリスは微かに表情を翳らせた。

「…それが取れなくなったら、どうするんだ。」

レオアリスの問いかけに、少年は困ったような瞳を上げた。

「もう少ないのは知ってるよ。無くなっちゃったら、そり

「や、困るよ。雇ってくれるとこなんてないし。他はまだちっちゃいし。」

「そうすると、この少年が子供達を世話しているのだろうか。自分以外の子供達をまだ小さいと言えるほど、目の前の少年も年を取ってはいない。それでも、彼らを支えているのは自分なのだと、そんな自負が、少年の眼の中にある。」

「それでも、いつかはなくなるだろう。」

「そんな事は考えた事も無かったのだろう、少年は暫らく戸惑って視線を彷徨わせていたが、つと顔を上げた。」

「そうしたら、オレ、剣士になるんだ。」

「剣士？」

「そしたら、王様に仕えられるだろう。」

少年の言葉に、子供達が笑う。笑いながら口を開いたのは少年よりも少し年下の少女だった。女の子だからだろうか、大人びた口調だ。

「何言ってるの。剣士なんて生まれつきじゃないとなれないんだから。あんたには一生無理。あきらめなさいよ。」

「うるさいな！なるんだっつたら。」

「なれないって言ってるでしょ！」

「なれるよっ！」

今にも噛み付かんばかりに顔を突き合わせて睨み合う二人を、レオオアリスの手が引き離れた。

「やめろって。仲良くしとけ。」

二人は一旦顔を見合わせ、舌を出してからそっぽを向いた。レオアリスは二人の頭に手を置いたまま、ロツトバルトを振り返る。

「お前、見たろ。こーゆーのをガキっていうんだ。俺とは大分違うだろ。」

家の壁に身体を凭せ掛けたまま、突然何を言い出したのかとロツトバルトは眉を上げて上官を見たが、すぐに黙ったまま口元に笑みを刷いた。どうやら散々子ども扱いされた事を、だいたい気にしてい

たらしい。

「ちつ…むかつくな。」

きよとんと自分を見上げた二人に気付き、視線を落とす。

「まあ、剣士にはなれなくても、剣は使えるだろう。訓練受けて、軍に入ればいい。」

「剣士がいい。」

きつぱりと言い切る少年に、レオアリスは首を傾げた。

「何で剣士がいいんだ？」

「レオアリスみたくなる！」

いきなり自分の名前を出され、レオアリスはぎよつと身を引いた。

「は？」

「何だよ、兄ちゃん知らねえの？王様に仕えてて、この国で一番強いんだぜ！」

「だから、なれるわけないっていつてんのに。ばつかじゃないの？」

「うるさいったら。レオアリスだって、オレたちみたいに家も着るものも無かったんだぞ。」

「いや、そこまでじゃ…」

気まずそうにぼそりと呟いたレオアリスを見て、ロットバルトは再び口元を歪めた。どうやら巷間には、そういう話が流れているらしい。

大分尾ひれも付いていそうだが、貧しい中から立身出世したとあれば、特にこうした少年達にとつては強い憧れの対象なのだろう。

「でも、ちゃんと王様に仕えられた。だから、俺だって頑張つて、強くなって王様に仕えるんだ。そしたら、皆で王様のいる都に行つて、飯だって腹いっぱい食べられる。そしたらもう、ぶたれたり蹴られたり、しなくてすむじゃないかっ」

今にも泣き出しそうになりながらも強い思いを宿す瞳を、レオアリスはじつと見つめた。少年の前にしゃがみこむと、その頭に右手を乗せてくしゃりと撫ぜる。

「いいじゃないか。頑張れよ。」

途端に顔をぱつと輝かせ、少年が女の子を勝ち誇って眺める。

「ほらみる、なれるって！」

「なれるとは言っていないじゃない。もう、変なこと教えないでよお兄ちゃん。」

「はは……」

少女の利発さというか、この年齢ならではの大人びた口調に、レオアリスは何とも返事のしようが無いままに笑いを漏らした。それから、彼等にもう一度視線を戻す。

「さつき言ってた、領事館で食料を配ってるのって、本当なのか？」

子供達は顔を見合わせてから、口々に頷いた。

「ほんとだよ。」

「いつも？」

「うん。最近はずっと。」

レオアリスとロットバルトが顔を見合わせる。

「けど、オレあれは嫌だな。」

意外な少年の言葉に、レオアリスは再び彼の顔を覗き込んだ。

「嫌って、食料配るのがか？」

「うん。だって、皆そればっか当てにしてさ。最近なんもしなくなつた。あんなのあるからいけないんじゃないの？」

逆に問いかけられ、レオアリスは言葉に詰まって眉をひそめた。

「そりゃま……自分で稼げるなら、その方がいいだろうな。」

「そういつたら、大人なんか怒るしさ。ばっかみただよ。もっと働いて稼いだほうがいいに決まってるじゃん。」

「ん……」

領事館で配られる食料。それは間違いなく住民の救済用だろう。では、今回の件の根底にあるのはそれだろうか。警備隊による組織的な売買は、大量の食料を購入するためか？

しかし、どう考えても先程の男達がそうした目的のために動いているように見えなかった。

「ロットバルト、お前はどうか…」

その瞳がふいに細められ、入ってきた路地に向けられた。ロットバルトも寄りかかっていた壁から身体を起こし、レオアリスの近くに寄ると路地に向き直る。

すぐにどやどやと複数の足音が聞こえ、先ほどの酒場にいた男達が空き地へと走り込んできた。子供達が悲鳴を上げ、小屋に走り込む。

「このガキども！何やってやがるっ」

「やっぱり隠し持ってたな！」

少年の持っていた包みに気付いて、目を剥き出す。少年がびくりと後ずさった。

ガストンは大またに近づいて少年の手から包みを奪うと、いきなり足を振り上げた。靴の先が少年の身体を蹴り上げる寸前でレオアリスに足を払われ、ガストンが地面に叩きつけられる。

呆然と顔についた泥を拭い、まだしゃがみこんだままのレオアリスを睨み付けた。

「てめえ…っ」

「ガキ相手に凄むなよ。」

「丁度いい、お前ら二人に用があつたんだ。」

男達が手に抜き身の剣を掲げ、二人を取り囲む。ロットバルトは外套を払い、僅かに体勢を落とすと剣の柄に右手を掛けた。鞘を掴んだ左手の指が剣の鏢に添えられる。

ロットバルトの背後で、レオアリスが立ち上がる。取り囲んだ男達の顔を眺め渡し、レオアリスは声音を下げた。

「何の用だ。俺達が用があるのは明日だけ。」

「明日来る必要はなくなつたんだよ。」

正面に立ったガストンが、笑いを含んだ声で答える。その言葉に返すように、レオアリスは冷ややかな笑みを浮かべた。

じわり、とその場の温度が下がる。

「俺は、欲をかくなくと、言わなかつたか？」

取り囲んでいた四人は、レオアリスが身に纏った空気に一瞬怯んだが、互いに眼を見交わすと一斉に剣を振り上げ、切りかかった。警備隊士だというだけあって、それなりに訓練された動きだ。

「子供らの前だ。殺すな。」

「手間ですね。」

放ちかけた剣を鞘に戻し、ロットバルトはそのまま左手で鞘ごと剣を突き出した。柄が左にいた男の鳩尾にめりこみ、男が泥の上に崩れる。

更に一步踏み込み、右の男の腹部に膝を叩き込むと、呻いて下がった顎を剣の柄で弾き上げる。声も無く倒れた男に眼もくれず、レオアリスを振り返った。

残りの二人は既にその足元に重なるように倒れている。

「一人連れてこい。」

そう命じて路地に出ようとし、レオアリスはふと立ち止まると振り返った。小屋の前で震えていた少年を手招く。

おずおずと近寄った少年の前にしゃがみ、その眼に視線を合わせた。

「仕事をやろう。こいつ等を縄か何かで縛って、逃げられないようにする。どうせ暫らく目を覚まさないだろうが、念のためだ。後からここに来る兵士に引き渡せ。これで報酬は五。やるか？」

「五?!」

一瞬躊躇うように倒れている男達を見回したが、すぐに勢い込んで頷いた。それから感嘆の色を浮かべて、もう一度ぴくりとも動かない男達に眼を向けた。

「兄ちゃんたち、すげえ強いんだな。」

「ちゃんと訓練すれば、お前も強くなれる。ほら、それよりお前の仕事だ、きちんとやれよ。前金は三。残りはこいつらを引き渡したときだ。」

ロットバルトは倒れたままの男達の顔を一つ一つ覗き込み、ガストンを見つけると、その身体を肩に担ぎ上げた。

手にしっかりと銀貨を握り締めながら、少年はちらりとレオアリスの顔を見上げる。

「ホントにちゃんと残りくねんの？兵隊なんて、すぐ知らないって言う。」

レオアリスは少しだけ黙って、少年の鳶色の瞳を覗き込んだ。

「嘘は言わねえよ。俺の名を出せばいい。」

「兄ちゃん、名前は？」

「レオアリス。」

少年はぼかんと口を開け、瞳を大きく見開いた。

## 第十二章（三）

ロツトバルトの肩に抱え上げられたガストンの姿に、通りにざわめきが広がる。何事が起こっているのかと住民達が遠巻きにその様子を見守る中、二人は領事館の門の前に立った。

領事館は敷地をぐるりと石積みの高い壁が取り囲み、街からの視線を拒んでいる。石の上に鉄の張られた分厚い門扉の前には、二人の隊士が槍を手に立っていたが、それに構う事無くレオアリスは歩み寄った。

呆けた顔でその様子を見ていた隊士たちは漸く我に返り、押し止めるように手にしていた槍を二人の前で交差させた。

「な…何者だ！ここをどこだと…」

「開門しろ。」

あまりに当然の如く告げられ、隊士達は目の前に立つ二人を、ぽかんと口を開けたまま見返した。

「何をバカな事を…許可なく立ち入らせる訳には…」

「この男なら許可も必要ないでしょう。」

ロツトバルトが担いだままのガストンを顎で示して見せる。未だ意識を失ったままのガストンの顔を覗き込み、漸くそれが誰かに気が付いて隊士達は驚いた声を上げた。

「ふ、副隊長！？」

「貴様等、どういっつもりで…！」

「急ぎの用だ。もう一度言っぜ、開門しろ。」

「…ふざけるな！」

隊士達が二人の前に槍を突き出す。どこか及び腰ではあるもの聞き入れる気配の無い姿勢に、レオアリスは一度だけ視線を空に投げた。

「仕方ねえな。まあ、こんな要求をひよいひよい通したら警備兵失格だ。」

面白そうな響きさえ滲ませながら、レオアリスは右手を持ち上げると、その鳩尾に添えた。漆黒の瞳に青白い陽炎のような光が過る。その瞳を真つ直ぐに向けられ、隊士達が息を呑んだ。

「罪が無ければ後で直してやる。けど、黒なら自前だぜ。」  
「すぶり、と手首まで鳩尾に沈む。」

そこから、青白い光が漏れ出した。  
手を引き抜くに従って、光が次第に辺りを染め、細く、鋭利に光が形を成していく。

光が消えた時、レオアリスの右手には、一振りの剣が握られていた。

青白く光を纏う、美しい長剣。

隊士達が目を見開き、声にならない呻きを洩らして後ずさる。

「剣……」

「どけ。」

有無を言わさぬ響きに弾かれ、隊士達が道を開けた。どこか楽しそうに笑い、レオアリスは手にした剣を振り抜いた。

空を断つような衝撃音と共に石と鉄の門扉が真つ二つに割れ、内側に向って倒れ込む。

隊士達が声を上げてその場へたりこむのを尻目に、レオアリスは地響きと共に舞い上がる砂煙の中へ無造作に足を踏み入れた。

剣を右手に提げたまま、厚みのある門の上に乗って歩く。ロットバルトもガストンを抱えたまま、レオアリスの後に従った。

「上将。」

「何だ？」

「黒なら警備隊を接收しますから、どちらにせよ修繕費は師団持ちですよ。」

「わざわざ指摘すんなよ……。」

背後のロットバルトに一度嫌そうに視線を向けてから、レオアリスは倒れた門の向うにひょいと降り立った。

轟音を聞いて前庭に飛び出してきた警備隊士達が、門の崩れた様

に呆然としたまま、二人を遠巻きに眺めている。ロットバルトは漸くガストンを地面に放り出すと、いかにもうんざりした顔で肩を竦めた。

「一応私は参謀官なのですがね。本来こうした労働には向いていない。今後検討してください。」

「言ってる。」

二人の会話の内容までは聞き取れないものの、あまり緊迫感のない彼等の様子に遠巻きにしていた警備隊士の一人が近寄ろうとしたとき、彼等の足元で放り出された男が身動いだ。

呻いて起き上がったその顔に気付き、再び隊士達が騒めく。

「副隊長!？」

ガストンはきよるきよると辺りを見回し、漸く自分が詰め所にいるのを悟ったのか、よろめきながら立ち上がり隊士達に向かって声を荒げた。

「こゝ、こいつらを捕まえる!し、侵入者だ!何をしてる、早くしろ!」

一瞬の沈黙の後、敷地内が騒めきを増す。遠巻きに見ていた隊士達がバラバラと飛び出して、レオアリス達を取り囲んだ。ガストンが後退りしてその輪の後ろに下がり、二人を振り返った。

「捕えて、牢にぶち込んでおけ!」

槍や剣が一齐に中心に向かって倒される。レオアリスは取り囲んだ切っ先に一向に構わず、ガストンに向かって足を進めた。

その身から、青白い陽炎のような空気がゆらりと立ち上がる。

レオアリスと抜き身の剣から発される強烈な圧迫感に圧されるように、取り囲んだ輪が歪んだ。レオアリスの正面にいた隊士が引つ繰り返った声で制止を叫ぶ。

「と、止まれ、止まれっ!」

「アリヤタに関する虚偽報告と密売の助長。今更知らないとは言わせない。」

レオアリスは冷えた視線を、ガストンの上に据えた。

「な、何なんだ、お前ら。」  
「軍だよ。」

ガストンの顔が引き攣り、瞬く間に青ざめる。兵達もまたざわめいてお互いの顔を見回した。

ガストンは暫らく慌てたように取り囲んだ隊士達と、その輪の中にいる二人を見比べていたが、数に分があると判断したのかすぐに薄笑いを浮かべた。

「ぐ、軍だと？どこの軍だか知らねえが、たった二人で、何をしようってんだ？」

「もちろん、警備隊は今日限りで任を解かれる。いずれ王都で裁判が行われる。お前等に正当な理由があるなら、弁明はそこでしろ。下手に抵抗をすれば、この場で俺が斬る。」

凍てつくような眼に圧され、ガストンは唸り声を上げた。傍らの隊士の槍を掴むとレオアリスに向って振り上げる。

ロットバルトが剣の鏢を弾く。  
高い金属音が弾け、砕けた刃が散った。

瞬きの内に 自分の喉元に伸びた白刃と、レオアリスの身体に届く前に砕けた槍を呆然と眺め、ガストンは引き攣るように喉の奥を鳴らした。

レオアリスは身動き一つしていない。何故槍が折れたのか判らなかった。

視線を向けた先でレオアリスの身体を覆う青白い光が、微かに明滅する。

ロットバルトが喉元で止めた剣を僅かにずらすと、ガストンは骨を失ったかのようにその場にへたりこみ、砕けた槍を不思議そうに見つめた。隊士達が再び押されるように後退る。

ガストンの喉元を剣で追いながら、ロットバルトは蒼い瞳に凍りつく色を浮かべた。ガストンの眼が慌しく二人の上を交差する。

「何…なんだ…」

ロットバルトの手にした剣の切っ先が、ガストンの喉に氷の感覚

を突き付ける。生命を冷やされるその感覚にガストンは喉を鳴らした。

「どこまで、誰が関わっているのか、答えてもらいましょうか。」  
「何を……」

口調だけは穏やかな響きでも背筋を凍らせる蒼い瞳には柔らかさの欠片もない。知らぬ顔をしてみせれば、躊躇いもなく首を落とすそうだった。

「い、言えば命は」  
「斟酌しますよ。」

ロットバルトが魅惑的とさえいえる笑みをその頬に刷く。ガストンは意志を計りに掛けるように視線を彷徨させたが、再び喉を鳴らした。

「た、隊長、それから、サムワイル男爵だ。命令を出しているのは」

あらかたの予想はしていたものの、ガストンの口から出たサムワイルの名にレオアリスは眼を細めた。一旦堰を切ると、ガストンは自分を救う道を探して忙しく口を開く。

「お、俺は二人に命令されたんだ。そうだ、仕方なかったんだよ！ 逆らえねえ。大体ほとんどはサムワイル男爵に上納して、俺達は大した上がりを買ってない。いや、食料、そうだ、食料と交換にして、この街の為だ！この街を」

ふいに、大気が震えた。

生木を引き裂くような音と光が走る。

「ロットバルト！」

レオアリスが警告の響きを発すると同時に、ロットバルトはガストンの襟首を掴んで力任せに放り出し、自分もそのまま飛び退いた。彼等のいた場所に数条の光が突き刺さり、轟音と共に石畳が捲れ上がる。

驚愕の声と騒めきが、領事館の正面に張り出した露台に集中する。チリと放電を帯びた風に黒髪を巻き上げながら、レオアリスはそこ

に立つ男を見上げた。

灰色の髪をした痩せて背の高い男だ。理知的な面の痩けた頬にはひきつった怒りが張りついている。

男の左手には、雷光の余韻がはぜていた。

「ジェビウス!？」

ガストンは露台に立つ男と、挟られ煙を上げる今まで自分のいた場所を愕然と見つめた。

(警備隊の長か。あれは。)

その手にしている物は、つい先刻あの少年達が見せた物と同じ、炭の様な黒い塊だ。術の効果を飛躍的に高めるための、触媒。

(術士か。)

「あ、あんた何考えて…俺まで…」

「口封じでしょうね。」

剣を突き付けたまま、笑みさえ含んだロットバルトの言葉に、ガストンは茫然と口を開け露台を振り仰いだ。

露台に立つ警備隊の長、ジェビウスは苛立ちの籠もった眼でガストンを睨め付けた。

「役立たずめ。私欲で勝手に売りさばくからこうなる。貴様などつとと殺しておけば良かったわ。」

「何…」

再び雷光が閃き、ガストンへと走る。レオアリスは右手の剣を振り抜いた。

生じた剣風が雷光を断ち切る。

ジェビウスは驚愕に見開いた眼を、ゆっくりとレオアリスに向けた。

「…剣で、雷撃を斬るだど？」

「ここで証人を殺されても困る。無論、お前もその一人だけだな。」

「何者だ?名乗る位の時間は与えてやるう。」

男の自信を表すように、手にした黒い塊が雷を纏った。レオアリスの口元に愉しげな笑みが閃く。

「名乗って事態が好転するか?…まあいいや。俺は、近衛師団第一大隊大将、レオアリス。」

引き攀った声が、広場のあちこちで上がる。

その名を知らぬ者はいまい。最高位の剣士。

そして、師団が動く意味を。

「レオアリス…」

「け、剣士」

「何で、近衛師団が…」

「王が」

ジェビウスの顔が青ざめ、ひきつり、それから憎しみに彩られた。隊士達の絶望の入り交じった呻きを掻き消すように、ジェビウスの哄笑が広場に響く。

「剣士だと?ははは!こんなちっぽけな街に、王も随分と小心なのだな!無用な街は滅ぼせとでも言われて来たか!」

レオアリスは一瞬だけ、瞳に怒りの色を灯した。だがすぐにそれは軽い疑念の光に変わる。ジェビウスの憎しみを含んだ哄笑は自暴自棄の響きを孕んでさえいる。

その響きを消さないまま、ジェビウスはレオアリスを見下ろした。レオアリスの瞳が暗い視線を受けとめ、射返した。

「…王の御意志はアリヤタ族の保護だ。その過程で、禁じられた捕獲、売買を行っているものがあれば、いかなる理由であろうと処罰される。」

「は!アリヤタ族の保護!処罰、処罰だと!?」

ジェビウスは背を反らせ、狂ったように笑いだした。レオアリスは黙ったままその様を眺める。

「何を保護し、何を処罰するのだ!王などこの辺境に目も向けていないではないか!この辺境がどれほど厳しい地か、王が僅かなりと理解している?」

「アリヤタの保護!保護でも何でも勝手にしろ。代わりにこの街を

滅ぼすがいい！」

「…生きる為に、アリヤタの命を奪うのは、正当な権利か。」

一瞬、ジェビウスは顔を強ばらせた。

「その通り。我々の権利だ。生きる為に使って何が悪い？」  
「それで、この街は救われたのか？」

レオアリスの言葉はただ街の様子から受けた印象によるものだったが、ジェビウスは一気に激高した。

飢餓を生む大地の貧しさ。

救済と思われた支援、年々減り続ける街の生産力、住民達の無気力な顔。

私利私欲の売買。

間違っていたと？

「貴様ごときに何が判る！」

青ざめ震える身体を手摺りに両手を付いて支えながらジェビウスは吐き捨てた。伏せた顔から、絞り出すような声が洩れる。

「王が何を知っている…」

ただ形ばかりの触れを出して、辺境の貧しさに何も手を打たないなら。

「王など」

顔を上げ、目の前の剣士を睨み据える。

「王こそが、滅ぶがいい。」

静寂が、広場を打った。レオアリスが大きく息を吐き、拳を握りしめると正面からジェビウスを見つめる。

「取り消せ。俺はその言葉を見過ごせない。」

「王の犬が。」

暫し睨み合い、レオアリスは瞳を閉じた。

「警備隊を拘束する。大人しく命に従い、王都での裁判に委ねろ。」  
既にそれは勧告ではなく、感情、同情の入り込む余地の無い、近衛師団大将としての命令だ。ジェビウスは激しく齒軋りをしたあと、弾けるように笑った。

「王の裁きなど！」

左手を高く掲げ、叫ぶように詠唱を口にする。

「抵抗は意味がない。」

「っ…いかに剣士と言えど、この力の前には何の役にも立たん！」

ジェビウスの手から雷光が迸り、レオアリスの右手の剣を撃った。

剣が弾き上がる。石畳の敷かれた足元が衝撃で捲れ、細かい土くれを全身に叩きつける。

放電のように一瞬、雷光が爆ぜながらレオアリスの身体を走った。

「っ」

僅かに見開かれた瞳が、弾き上げられた剣を眺め、笑った。

「面白エ。」

剣士として持つ好戦的な一面がその姿を覆うかのように、青白い光が身体を取り巻いてゆらりと立ち上がる。

ジェビウスは速い詠唱を唱えた。手にした黒い塊の周囲の空気が歪む。

立て続けにレオアリスの上に降り注ぐ雷の矢が、地面を砕き、土煙を巻き上げる。煙は瞬く間にレオアリスの姿を覆った。

その様子を息を呑んで眺めていたガストンの口から、歓喜に似た引き攣った笑いが漏れる。

「…は、ははっ」

殺されようとした事も、首に白刃を突き付けられているのも忘れたかのように、ガストンは勝利を確信して身を乗り出した。だが口ツトバルトは顔色一つ変えていない。

次第に煙が晴れ、そこに少しも変わる事なく立つ、レオアリスの姿が現われる。ジェビウスは露台の手摺に手を付き、晴れていく土煙に目を見開いた。

「馬鹿な…！」

レオアリスの右手に提げられた剣が一闪し、立ち籠める煙が切り

裂かれ、霧散した。

「ここまでか？なら、それを使っても無駄だったな。」

露台へと一步踏み出したレオアリスから後退りながら、ジェビウスは再び左手の塊を掲げた。

「無駄だと言ってるだろう。」

「慢るな、剣士！」

吐き捨てる言葉に、レオアリスが眉をしかめる。

「貴様が王の命を受けようと、ここは貴様等などが来る場所ではない！これまでどおり王都で安穩としている！」

レオアリスはジェビウスの顔にじつと瞳を注ぐ。視線に射られ、ジェビウスは口籠った。周囲との距離を測るように一度視線を巡らし、レオアリスは露台に向き直った。

青白い剣がゆっくり輝きを増す。

「…もう一度言うぜ。大人しく投降し、王の判決を待て。」

剣を右手に提げたまま、ジェビウスへと歩み寄る。怒りに顔を歪め、ジェビウスは左手を高く掲げた。詠唱とともに左手に膨れ上がった光が、周囲を染め上げる。

掻き集められた光が大気を介して伝わり、肌を焦がすようにチリチリと震えた。光は警備隊の本部全体を飲み込もうとするかのようになり、隊士達の頭上に差し掛かる。

隊士達が恐怖に押され、押し合うように逃げ出した。

「消える！」

「チッ」

叩きつけるように放たれた光球に向って、レオアリスが石畳を蹴る。

同時に振り抜いた剣が青白い帯を引いて走る。刀身が光球を捉え、一瞬レオアリスの姿は、光に飲み込まれた。

構わず、剣を振り切る。

耳を聳する炸裂音が響き

直後に、光球は跡形もなく消えた。

呻き声を上げたジェビウスの手の中で、黒い塊が砕け散る。それを茫然と眺め、ジェビウスはその場に崩れるように座り込んだ。

逃げ出し掛けていた隊士達もまた、レオアリスの剣が光球を砕く様を声もなく見つめていたが、再び我先に、倒れた門に向かって駆け出した。

ふいに、複数の翼のはばたきが耳を打った。

風が巻き上がり、広場に立ち竦む隊士達の上に影が差す。

上空を見上げた隊士達から、口々に驚愕の声上がる。

建物の上の空を十数騎の飛竜が旋回していた。

掲げられた軍旗は、黒地に暗紅色の双頭の蛇。

「近衛師団……！」

最早逃れようも無く、隊士達は手にしていた武器を地面に落とし、誰からとも無くその場に膝を付いていく。

飛竜は隊士達を取り囲むように、広場に次々と降り立った。

レオアリスの声が広場を支配する。

「王名において、これより警備隊は我々第一大隊の指揮下に置かれる。隊長以下幹部は速やかに我が前に出頭せよ！」

## 第十三章

師団兵によつて警備隊長以下、幹部、隊士達が拘束される中、右軍少将ファーレイが足早にレオアリスに近寄り、左腕を胸に当て敬礼した。

「上将、掌握完了しました。現在、本隊は山中の四方に展開中です。」  
差し出された士官服の上着をロツトバルトが受け取り、レオアリスの肩に掛ける。

「この先の路地に、三名ほど捕らえてある。行つて引つ張つて来い。それから、子供がいるから、その子等にこれを。」

銀貨を手渡され、ファーレイは不思議そうな顔をしながらも頷いた。

「村を確認したか。」

「時間的に、そろそろ中将が入っているはずです。」

「なら、俺達も行こう。飛竜を。」

踵を返しかけたレオアリスを、ファーレイが引き止める。目で棟の入り口を示した。

「それが、上将。地下に……。」

一階の突き当たりに地下へと下る狭い階段があり、一段降りる毎に黴て淀んだ空気が重く落ち身体に纏わりついてくる。それから、血の凝った臭気。

「こちらです。」

扉を押し開けると、途端にその臭気は濃さを増した。検分していた兵達がレオアリスの姿を認め、胸に左腕を当て迎える。彼等の顔

には疲労の色が濃く浮かんでいる。

レオアリスはぐるりと室内を見回した。それほど広くはないその中には、入って右手の部屋の三分の一ほどが鉄格子に仕切られた檻になっでいて、扉の正面奥には門と錠が幾重にも付けられた頑丈な木の扉がある。配置の位置からすると、そこから外部へと出る扉のようだった。

そして部屋の左手には、薄汚れた作業台があった。点々と赤黒く飛び散りこびり付いているのは血だ。床の上は染み込んだ血で黒く光り、その上にも檻の中にも、白い毛が散っている。

「何か判った事は。」

ロットバルトの問いに、檻を調べていた兵が顔を上げた。

「詳しくは判りませんが…置いてある水が古くはありません。おそらく数日前まで捕えられていた者達がいたのではないかと思われま

す。」  
ロットバルトは台にこびり付いた血に指を滑らせた。血はすっかり乾いている。

「さすがにいつ処置されたのか、これでは判りませんね。」

ロットバルトの言葉に、レオアリスは厳しい表情のままその台に視線を落とした。

新たに入室した兵がファアレイに近寄り、何事かを耳打ちする。

ファアレイは頷くとレオアリスに顔を向けた。戦場など見慣れている筈のこの剛直な少将の顔にも、押さえ難い嫌悪の色が見える。

「上将。奥の地下牢に、男が一名繋がれているようです。ひどく衰弱していますが、ジウスと名乗り貴方への面会を希望していると。

今回の密書を送った者だと言っているようですが、お会いになりま

すか。」  
「どこだ？」

ファアレイは一礼し、兵に頷く。兵は先に立って扉を出ると石組の廊下を右へと進んだ。

角を曲がった先に鉄の格子戸があり、内側に向かって開かれている。



然と密猟に関わっている。」

膝を掴んだ手が、僅かに震えている。

「もちろん、どの隊員も最初から密猟に手を染めていたわけではありません。初めのうちは警備隊の職を得て、任務を全うしようと皆真剣でした。今でも、それが完全に失われたとは思わない。けれど二年前、それまで僅かにでも採れていた作物が、病害によりほとんど全滅してしまいました。その時からです。隊長、ジェビウスがサムワイル男爵からその話を受けて来ました。」

ジェビウスはサムワイル男爵に食料の支援を依頼した。その見返りとして要求されたのが、アリヤタ族の内臓だったという。

サムワイルは上納した分だけ、食料や薬を支援した。裏を返せば、それがなければ支援はなかったということだ。

「王都に支援を求めようとは思わなかったのか。」

「王都！？王都が何をしてくれるんです！？これまでこんな辺境の街に、少しでも眼を向けていたんですか！」

思い掛けないほどの強い拒絶と不信の響きに、レオアリスは押し黙った。それは、先程のジェビウスと同じものだ。ジウスがはつとして、束の間激昂した顔を隠すように頭を垂れる。

「…すみません。あなた方は今回こうして動いてくださった。確かに、我々は最初から、王都に話をすべきだったのかもしれませんが。王都でなくとも、少なくとも、辺境軍に。」

ジウスは石牢の壁に眼を遣り、窓のないその壁の向こうを見透かそうとするように目を細めた。その先にはミストラの尾根がある。

外敵の侵入を阻む堅牢な城壁。天然の防御。

そして、慈悲を持たない威容。

「私は、この街で生まれ、育ちました。飢饉がなかったとしても、この街は貧しい。ミストラから吹き降ろす寒風に晒され、農作物もろくに実をつけません。取り立てた産業も無く、王都からも遠く、交易も儘ならない。ですから、ある意味、そうして自分たちの暮らしを守っていくのは、仕方の無い事だと思っていました。」

王

都の方には判らないでしょう。口にする物は水ばかり、子供等は生まれても多くは飢えて死に、親から見離されて路地で生きる。…そんな土地もあるのです。」

ジウスの声には抑えようとしても抑えきれない怒りと苦しみが滲んでいる。それはこれまでこの街で過ごしてきた分だけ、彼等が重ね上げてきたものだ。

ロットバルトはレオアリスの横顔に視線を落とした。そこには何かの感情の色は無い。ただ黙ったまま、ジウスに瞳を向けている。

ややあつて、レオアリスは微かな溜息を含んだ声で、低く問いかけた。

「何故、報告する気になった。報告したとして、王の勅令に背いた罪を減ぜられる保障はどこにも無い。」

「アリヤタ族に、直接お会いになった事は。」

唐突な問いに、レオアリスは僅かに驚いたように眼を見開いた。

「…ないな。」

「つい先日、私は初めて、彼らと僅かばかり話をする機会がありました。おかしいとお思いでしょうが、それまで一切口を利いた事は無かった。利かない様にしていました。彼等もまた我々と同様に生きていくものだ、気付きたくなかったです。けれど、

先日、隊士達が四名のアリヤタ族を捕らえてきました。偶然にも、その晩の見張りは私一人だった。」

アリヤタの男はジウスに向かって、家族だけは逃がして欲しいと、そう言った。妻と、まだ幼い子供達だ。

彼等だけは、どうしても生き延びなければいけないのだと、アリヤタの男は言った。

ジウスにも妻と子がある。妻子を食べさせる為だからこそ、そうして密売に手を染めたのだ。ここで彼等を逃がす事は、自分の妻子を飢えさせる事だ。逃せば、悪くすればジウスが殺される。

けれど。

迷うジウスの耳に突き刺さるように、アリヤタの男の言葉が飛び

込んできた。

気付けば、ジウスは檻に手を掛けていた。

ジウスは再び、震える手に視線を落とす。

「私は、彼等を逃がしました。いたたまれなかった。正義感や義憤など、そういったものからではなく…ただ事実には、耐えられなかったのかもしれませんが。」

「いつ、どこへ向かった。」

「三日前の晩に。どこへかは、見届けられませんでした。けれどもおそらく、彼等の村へ。追っ手は、多分出たでしょう。私は捕えられ、判りませんが。」

顔を上げ、三人を見渡す。

「どうか、あの家族を。」

ジウスは口にし難い、何かを搾り出すように言葉を繋ぐ。目を逸らしたい罪と逸らし難い罪から身を隠そうとするかのように、両手で頭を覆った。

「 彼等は…」

その言葉を聞き終えるか終えないかの内に、レオアリスは身を翻した。

「ファーレイ、飛竜を貸せ！ロツトバルト、来い。」

石造りの廊下を駆ける間にも、ジウスの言葉が、頭の中で繰り返し響く。

「 彼女は、アリヤタの 〴〵」

鋭い羽音を立て、飛竜が空へ駆け上がる。

警備隊の敷地を覗き込むように集まっていた住民達が、驚いた顔

を上げ、ミストラ山脈へ駆ける二騎の飛竜を見送った。

## 第十四章

辺境軍は第七区と呼ばれる地域一帯を所管している。これは軍内の呼称で、辺境軍が正式には正規東方軍第七大隊という為だ。実際にはその一帯をミステイリア地方と言った。

駐屯地はミステイリア地方最大の街、軍都サランバードを拠点に置かれ、この地方と辺境部の治安保守、またミストラ山脈を越えて侵入しようとする兵力の監視、排撃を任う。尤もここ数百年他国の侵入はなく、監視も少し穏やかなものになっていた。

とは言え主要な山道の要所には監視所を設け、一個小隊が駐屯している。

ここサランバードは、ミストラ山脈からは距離で言えば約六十里、馬程でおよそ二日程の距離があった。

駐屯している兵数はサランバードで中隊一隊約千名、ミステイリア地方全体で三千の兵数があっている。

ミストラの監視所から急使が走ったのは夕刻の事だった。

師団が動いている、と第一報はそれだった。

「師団？ミストラでか？」

正規東方第七軍副将イエンセンは、拠点となるサランバードの城内の執務室で慌ただしく入室した下士官に眼を向けた。五十がらみのしぶとそうな男は、白いものの混じった顎髭を手で擦った。

「規模は？」

「中隊一隊です。」

「中隊かよ、でかいな。で、所属は言ったのか。」

「第一大隊中隊右軍です。任務により山中の制圧行動に入る、看過されたし、と一報があったようです。」

「まったく、王都じゃあないぞ、あそこは。」

呆れた口調でそう言ったものの、イエンセンは髭を引っ張る手を止めて考え込んだ。

師団が動くという事は、王命が下っているという事だ。しかも第七軍に当然あるべき事前の通告が無かったとなれば、その任務が密命ということの意味する。

（おまけに第一か。剣士が出てんのか？）

あの辺りで何があっただろうかと思いを巡らせ、イエンセンははたと自分の頬を打った。

彼の指示を待っていた下士官が驚いて背筋を伸ばし副将を見つめたが、戸惑う部下の様子に構わずイエンセンはぶつぶつと口の中で呟いた。

「こりゃ参った。下手すりゃ絡んでると思われかねん。事前に断りが無かったって事はもう思われてるか…？」

確証はなくとも疑義はあるということか。

いや、イエンセンが把握する限りで第七軍内部が密猟に関わっているという事実はない。疑義と言っても可能性を考慮している段階までではないか。

師団が直前なりと作戦行動を通告してきたという事は、第七軍に関わりなしと判断したか。

（そう安易な判断もできん。）

「副将、あの、いかように…」

下士官がイエンセンの思考を妨げるのを恐れるように口を挟むと、漸く灰色の眼が上がる。

「あ？ああ、師団か。構わん、要望通り動かさせてやれ。ただ動向は随時把握して伝える。」

敬礼して退出する下士官の背を目で追いながら、イエンセンは一度深く腰掛け、またすぐに立ち上がった。

どちらにせよ、王都の総本陣に確認してみる必要がある。

第七軍大将、レベッカ・シスファンに報告と相談を行うため、イ

エンセンは扉を出ると、廊下の突き当たりにある大将執務室へ向かった。

## 第十五章（一）

アリヤタ族の村は、折り重なる山脈の奥深く、深い谷のその中腹にあつた。

普段ならひしめく木々に遮られ、上空からそれと知る事は出来なかつただろう。しかし今、夕闇の落ちかかった空に、険しい斜面の中腹から幾筋もの煙が立ち昇っていた。

何があつたのか、漠然と想像は付く。酒場にいた男達の言葉。

『明日になれば』

『これが、最後の』

彼らは、最後の狩りをしたのだ。

村の上を師団の飛竜が数騎、ゆっくりと旋回している。

飛竜の上から、凍りついたようにその光景を見つめているレオアリスに、ロットバルトは促すように口を開いた。

「…制圧は完了しているようですね。残党を捜しているのか  
上將？」

ふいにレオアリスが眼下の斜面に向けて、飛竜を降下させた。

「何を」

それを追つたロットバルトの視界も、木々の間から覗く白いものを捉える。

薄闇の中ではつきりとそれが捉えられたのは、その数が一つのみではなかつたからだ。

二人は飛竜から降り立ち、ゆっくりとそれに歩み寄つた。

目にしたものを咄嗟に理解するのは難しかっただろう。

夕闇が辺りを覆っていたせいではなく、信じ難い光景故にだ。

夕暮れの中まばらな木立の間に、点々と、白と赤黒いものが転がっている。土や短い下生えも、飛び散つた飛沫にまだらに赤黒く濡れている。

純白の毛皮が見えるのは、僅かだ。

腹を割かれ内蔵を抜かれた死骸が、点々、点々と転がっている。数十体もに及ぶ、その数。

まだ乾ききっていない、ねっとりとした血の臭いが全身を押し包む。

思考が白くなる程の怒りを、これ程の怒りを、この光景に感じるというのに

何故、これを引き起こす者がいるのか？

己の欲と利益の為だけに、これが出来るものなのか。

それとも、相応の理由さえあれば、許される行為だろうか。

押し黙ったレオアリスの背中に視線を向けたまま、ロットバルトは静かに息を吐いた。

（ 一つだけ言えるのは ）

売買は、需要と供給によって成り立っている。

欲する者もまた、間接的にこの殺戮に加担している。

手に入れようとする者の欲が、それによって利益を得ようとする者の欲を刺激する。

欲する者がいるからこそ、この光景は現実として、今ここにあるのだ。

「上将…。」

レオアリスは振り向かないまま、更に数歩その光景に歩み寄り、両手を握り締めた。搾り出すような、聞き逃しそうな程の微かな声が、ロットバルトの耳を打つ。

「俺は、これをやるうとしたのか。」

ロットバルトはただ黙ったまま、レオアリスの僅かに覗く頬の線に視線を向けた。

答えを求めている訳ではないのは、その響きから判る。ただ自らを突き詰めようとする自問だ。

何が正しい選択なのか。

もちろん、直接の原因は売買に関わる者達にある。けれどおそらく多くの者が、この光景を前にすれば、自らに問いかけずにはいら

れまい。

自分はこれを、この光景を、作らずにいられるか？

「 行こう。」

視線を落とさないまま、レオアリスはそれに背を向けた。

## 第十五章（二）

飛龍が地面に降り立つのももどかしく、その背から飛び降りると、レオアリスは燻る村の中央に立つ、右軍中将ヴィルトールの姿を認めて駆け寄った。

兵が一斉に跪いて迎える。

「アリヤタ族は。」

木を組んで作られた家々からは燻った煙が上がり、あちこちに警備隊士らしき者達の倒れ、或いは師団兵によって取り押さえられている姿が見える。

ロットバルトも傍へ寄り、ヴィルトールと視線を交わしてから、その指差す先に視線を向けた。

少し離れた場所に、周囲を師団兵に囲まれるようにして、保護されている半獣達が見えた。

犬に似た身体を持ち、全身を純白の毛並みに覆われた美しい姿をしていたが、今はそれも土と血に汚れ、誰もが疲れ果てたように座り込み、俯いている。

その数は十体にも満たない。

レオアリスは焦燥の入り混じった瞳で、彼等を見渡した。

「…この中に、街から逃れてきた者達はあるか。幼い子供と、その親だ。」

レオアリスの言葉にヴィルトールは一旦彼等を見渡してから、首を振った。

「ここにいるのは成獣ばかりです。今のところ、子供は見当たりません。」

レオアリスは強張った顔のまま黙り込んだ。その手が強く握り締められる。

「早急に探させる。まだ山中にいるかもしれない。」

ヴィルトールが頷き、数名の兵を呼び寄せる。レオアリスはアリ



燻る熱の籠った筈のその場が、やけに寒々しく感じられる。

誰からとも無く、詰めていた息をゆっくりと吐き出す。

どこまで行けば、底辺に辿り着くのだろう。辿り着いたところで救いの無いそれを見たいとは思わないが、それでも、そう思わずにはいられないものがある。

「我々が、術具として捕獲されるようになったのは、我々自身の愚かさ故でもあるのだ。かつて貧しさを嘆き、我々は話し合った上で、村に伝えられていたそれを、外界に売った。それは我々の飢えをしのいでくれた。始めの内我等は、まるで穀物でも取引するかのように、半ば得意げに、それを売買したものだ。」

それは彼等が思った以上に容易く、高額で取引された。村は一時潤い、これでもう飢えなくて済むと、誰もが喜んだ。

だが。

「無論、それが何から創られたか、一切を伏せたが　いずれ探り当てられた。亡くなった一族の身体から、我々はそれを作っていた。」

とつとつと、疲れと諦めだけを滲ませた声が続ける。

「出すべきではなかった。我々は、別の道を探すべきだったのだ。だが、今更それを言ってももう遅い。結果はご覧のとおり。」

老人は首をめぐらせ、燻り続ける打ち壊された村を示した。もはやこの場所に住む事は難しいだろう。

けれども、本当に失った物は、それではない。

「だからこそ、これからは……」

だが、その先の答えは判っていた。アリヤタの男が、ジウスに告げたではないか？

老人の声が低く低く、熱の燻るその場を這う。

「無理なのだ。…術具には、女の方が価値が高かった。この村にはもう、女はいない。最後の一人は、もう何日も前に連れて行かれた」

その場にいた全員が、押し殺したように息を呑み、ただ黙ったま

ま白い半獣達を見つめた。

『彼女は、アリヤタ族の最後の女だ。』

アリヤタの男は、ジウスにそう言ったのだ。

彼女を失えば　　アリヤタ族は、滅ぶ。

アリヤタ族が、この先子を成し、再びその数を増やしていく事は、もはやあり得ない。

燃え残っていた柱が音を立て、燻った煙と灰の中に崩れる。

レオアリスは尚も抵抗するように言葉を継いだ。

「彼等は逃がされたと聞いている。今、軍が山中を押さえている。まだ分からない。」

『我々が滅びるのなら、その理由は、この身の裡にある。』

「やめてくれ！そんな事を納得するのか！？」

『…我々はここで滅びて行く。子孫を増やそうにも、子を産むものがいないのだ。我々の身体から作られた呪物でさえ、失われたそれらを再生させる事は出来ない。…もはや止める手立ては無いのだよ。』

どんな秘術も、失われた命を戻す事はできない。

失うのは驚くほど容易く、取り戻す事は至難だ。

そして多くは、失われて初めて、その事に気付く。

失うのは何故、そんなにも容易い？

何故、考え直し、やり直す猶予を与えてくれないのか。

正しい選択は、どこにあった？

レオアリスは、自分の中で何かが、微かに脈打つを感じた。鼓動と合わさるように、一定の脈動を刻む。

老人の、穏やかとさえ言える声。

『戻す術も知らないままに、我々はそれに手をつけた。もう、終わりにしたい。』

我々はこの地で、ゆっくりと最後の時を待つ。

打ちのめされたような静寂の中、レオアリスは自分の中で鳴る鼓動を数えた。鼓動と重なり合っていた脈拍が、次第に鼓動を超えて大きくなる。

飛竜の羽音が響き、一頭が村の外れに降りた。視線が向けられる中、二人の師団兵に押しやられるように、数人の男達が降ろされる。続いてまだ小さなアリヤタの子供が走り出ると、戸惑ったように辺りを見回し、仲間の許に駆け寄った。

一人が腕を広げ、その身体を抱きとめる。まだ母親から乳を与えられる程の年だ。地面に下ろされた麻袋から、乾いた血がこびり付いた白い毛が覗いている。

ロットバルトが歩み寄り、その前に膝を付くと袋の口を開けた。腹部を切り裂かれた白い身体が、レオアリスの眼にもちらりと映る。アリヤタ族が悲痛の声を洩らした。

「これは？」

傍らの兵にロットバルトが顔を向ける。

「母親です。幸い、その子供だけは無事でしたが…」

立ち尽くしたままその光景を見ていたレオアリスの視界を、一瞬何かの映像が過ぎった。

家を舐める炎。血。誰かが、倒れて…。

どん。

身体の中で、激しく叩きつける音に、レオアリスは視線を鳩尾に落とした。

「…上将？」

ロットバルトが様子に気付いて顔を上げ、訝しそうに眼を細めた。レオアリスの身体の周りを、かすかな青白い光が取り巻いている。剣光。レオアリスの剣が纏う光だ。

胸元の青い石の付いた飾りを、震える右手が握り込んでいる。まるでそこで手を支えているかのようだ。

その手が、引き寄せられるように下がり、鳩尾に当てられた。

黒い瞳が、苦しげに歪められたかと思うと、レオアリスは崩れる

ようにその場に膝を付いた。鳩尾を掴んだ手は、込められた力の為に血の気が失せ、白い。

「上将！」

手を当てているのは、レオアリスの剣。彼の十三対目の肋骨がある辺りだ。最初は、剣を出すつもりなのかと思った。だが、違う。

抑えようとしているのだと、そう気が付いて、ロットバルトは立ち上がる。

「…寄、るなっ」

噛み締められた歯の間から押し出される声。

一步踏み込んだ途端、鞭のように叩きつける風が、ロットバルトの頬を弾いた。刃が掠めたかのように、皮膚が裂ける。

「な」

「退け…っ」

自分の中で荒れ狂う何かを抑えるように身体を屈めたまま、上空を指差した。一瞬の躊躇の後、ロットバルトは背後を振り返った。

「中将！退去を！飛龍で上空へ」

不審そうに振り向いたヴィルトールの眼が、蹲ったレオアリスの姿を捉える。

「上将？ロットバルト、何が…」

「分かりません。ただ、退けと」

何かが碎ける音に振り返る。

レオアリスの足元がひび割れ、陥没している。

ヴィルトールは踵を返し、本隊へと走った。

「アリヤタを飛竜に乗せる！全騎上空へ上がって待機！急げ！」

## 第十五章（三）

その指示を背後に聞きながら、ロットバルトは再びレオアリスに身体を向けた。だが、踏み出そうとした足は、何かに圧されでもするかのようになり、前に進まない。

「お前、も、行け」

「しかし」

「いいから、早、…っ、あ」

レオアリスの瞳が大きく見開かれた。

地面に衝いていた腕が、がくんと折れ、額が地面の上に落ちた。身体を包む青白い光が、急激に強くなる。

「あ、あああっ」

肺から吐き出されるような悲鳴。レオアリスの足元から、放射状の亀裂が走った。

立ち尽くしていたロットバルトの腕をヴィルトールが掴み、強引に飛竜の上に引きずり上げ、一息に上空へと駆け上がる。

一瞬後、突風が起こり、レオアリスを中心に巻き上がった。

周囲の木々が巨大な斧で断ち切られたかのように、次々と倒れていく。

山肌に亀裂が走り、次の瞬間、轟音とともに斜面が陥没した。

崩れ落ちる土砂がレオアリスの身体ごと、燃え残った村を飲み込んでいく。

「上将！」

上空を旋回する飛竜の背中から身を乗り出し、ロットバルトは崩れ落ちる土砂を覗き込む。飛び降りようとした肩をヴィルトールが抑えた。

「一体、何が起こってるんです!？」

「…分からない。今まで、見た事がない。ただ、力が暴走してるとしか」

もつもつと立ち上った土煙が、青白い光に切り裂かれる。

光は急激に膨れ上がり、爆発した。

崩れ落ちた土砂が、爆発の衝撃に、上空へと吹き飛ばされる。

降り注ぐ土砂の幕の向こうに、未だに蹲ったままのレオアリスの姿を捉え、ロットバルトは僅かに息を吐いた。

山はその斜面の半分が、抉られたように崩れ落ちている。

これほどの力の噴出を無理に身の裡に抑え込もうとすれば、レオアリス自身も無事で済むとは思えなかった。

苦痛を表すように明滅する光。

(どういふ事なんだ?)

レオアリスの姿を捉えたまま、ロットバルトは素早く思考を巡らせる。これまでに積み重ねられた幾つかの要因。危うさを感じる時は確かに数度あった。

しかし直接の切っ掛けは、おそらくあのアリヤタの女の死だろう。それがレオアリスにどんな影響を与えた?

しかし今は原因を考えている時ではない。レオアリスの意識が保たれている間に抑えなくては、あの状態ではいずれ苦痛は意識を飲み込む。

「…何とかして抑えなくては。」

何とかして、とは随分無策だとロットバルトは我ながら呆れた。

何の為の参謀官か。

だがこの状況では、確実な手段など思いつきもしない。

苛立つ思考を抑え、ロットバルトはヴィルツールを振り返った。

一つ。だがその方法は。

「…術士は?」

「いるが、」

剣士を抑えられる術士など、そうはいない。まして、レオアリスは最高位と謳われるほどの剣士だ。抑え込めるとしたら、四大公か…。

続く言葉を飲み込み、ヴィルトールはすぐ横を飛んでいる飛竜を手招いた。程なく、隊の術士三騎がヴィルトールの傍に乗騎を寄せらる。

「これだけか。…一時的にでもいい。抑えられるか？」

術士達は不安を隠せないままお互いに顔を見合わせた。それでもヴィルトールに頷く。

「全員でやれば、おそらく…」

「では、すぐに取り掛かれ。」

青白い光は球状になり、不規則に拡張を繰り返している。

光が広がるうとする度に、斜面が崩れ落ちていく。

術士達は光を囲むように飛竜を散開させると、その場で詠唱を始めた。

詠唱と共に、それぞれの術士の足元から光の筋が中央に向かって走り、上空に白く光る魔方陣が結ばれていく。

身体の中で力の塊が外に出ようともがく。抑え込もうとする度に、全身の骨が軋むような激痛に、意識が混濁する。

鬱蒼とした森を照らす炎と、

焼け爛れ、崩れ落ちる家。その崩壊の音。

自分に覆い被さるように倒れ掛かる、

紅く染まった身体。

頭の中で何かが弾ける。

激しい音と共に、師団兵の詠唱が断ち切られ、形を結びかけていた陣が消滅した。

「だめです！弾かれてしまう。」

「まだだ、もう一度……」

『これを』

ふいに声がかかり、ヴィルトールは声の主に視線を向けた。

傍らの飛竜に乗せられていたアリヤタ族の老人が、抱えていた袋から黒い塊を取り出し、差し伸べる。

彼らの内臓から造られた、触媒。

『術を強化できる。使いなさい。』

ロツトバルトが息を吐く。それが唯一、今できる確実な方法だ。

ヴィルトールは戸惑ったように、その塊を見つめた。

「……気持ちは有り難いが、それを使う事を、上將はお許しにならないだろう。」

『我々の意思でお渡しするのだ。気にする事はない。』

目の前に出された触媒を使えば、今の状態を抑えられるのだろう。だが。

「……躊躇している暇はありません。ここで抑えなければ、結果は目に見えている。」

光の中心に目を据えたままロツトバルトに、ヴィルトールはまだ迷った目を向けた。ロツトバルトが肩越しに視線を超越す。

「最善の策は、それしかない。言い訳は後で考えましょう。」

レオアリスがどれほど厭おうと、今ここで失う訳にはいかない。

ヴィルトールは蒼い瞳を覗き込み、軽く溜息を付いた。

「……仕方ない。」

ヴィルトールの考えもまた、ロツトバルトのそれと違いはない。

アリヤタの手からその黒い塊を受け取ると、ヴィルトールは背後を振り返った。

「他の者達は街の手前まで退け。残るのは術士だけでいい。……それと、あなた方の内どなたか一人、残っていたきたい。」

触媒を差し出した老人が頷く。

ロットバルトはヴィルトールの手から、アリヤタの触媒を受け取った。乾いて軽いはずのそれは、ひどく手に重く感じられる。

詠唱が流れ出し、レオアリスがいる谷の上空に、再び光の魔法陣が結ばれていく。今度は全ての像が完全に結ばれ、陣は光を増した。「どうやる?」

ヴィルトールがアリヤタを振り返る。

『陣の中心に、投げ入れるだけでいい。それで術は強化される。』

陣の下では、青白い光球がじりじりと膨らみ続けている。ロットバルトは手にしていた触媒を投げ入れようと、腕を上げた。

繰り返し、激しく明滅するように現れ、消える映像。  
その度に、身の裡の脈動が強さを増す。

( こんなものは、知らない。 )

炎に包まれ、崩壊する家々。

繰り返し。

目の前に転がる、血に塗れた身体。

繰り返し。

( やめる、知らない! )

上空に異様な気配を感じ、レオアリスは瞳を上げた。

青白い光を通して、そこに何かがある。

アリヤタの…。

「よせ!」

身体を起こそうとした瞬間、全身の骨が砕けそうな程に軋んだ。意識が霞む。

急速に広がった闇が、足掻く意識を呑み込んだ。

よせ。

たった一度だけ、レオアリスの声が聞こえた。

すぐに光の中に埋もれる。それと共に、光が急激に膨らんだ。

ロットバルトは僅かに躊躇した腕を、再び持ち上げる。

「聞けませんね。貴方が罪を感じる必要はないと、申し上げたはずだ。」

魔法陣の中央に向かって投げ入れようとした瞬間、魔法陣が激しく明滅した。

「！何だ…」

水に浮いた糸のように、ぐにやりと歪む。

「上将？」

「違う…」

ヴィルトールが灰がかった鋼色の瞳を見開き、上空へ向ける。ロットバルトはその視線を追った。

歪んだ魔法陣の上空に、大気が渦を作っている。

雷鳴のような響きと激しい圧力の塊がその中心から叩きつけ、山肌に見える木々が嵐に煽られるように大きくうねった。

渦の中心が、地上に向かって膨らむ。

大気の固まりから巨大な手が生まれていく。

山を一つ掴めそうなほどのその手は、僅かに金色の光を纏った。

「…王…！」

畏怖の響きを露わに、ヴィルトールは飛竜の背の上に跪いた。打たれたように、ロットバルトも膝を折る。

中空に出現した手は、地上に向かって伸びると、その指を広げ、膨張を続けていた光を掴んだ。

## 第十六章

遠くの大気が地響きのように震えていた。

強烈なまでの圧迫感に身体を叩かれて跳ね起き、自室の露台に飛び出したイエンセンの目にも、それははつきりと映った。

金色の光を纏った巨大な手が、ミストラ山脈の上空に浮かんでいく。

「王……」

茫然と呟いた舌は喉の奥に張りつき、声は空気を擦るようだ。

「……何、やってやがる、師団は……」

何故、何に対して王が顕現したというのか。

今、ミストラ山脈にいるのは。

「……まじいんじゃないのか……?」

呆けたように呟いた自分に気付いて舌打ちし、イエンセンは身を翻し居室を出ると、付近にいてやはり茫然としている部下に指示を飛ばしながら大将シスファンの居室へと走った。

「中央に確認しろ！それから全軍をいつでも動けるようにしておけ！」

軍都サランバードが俄かに慌ただしさを増していく。

おとないを告げるのももどかしく駆け込んだ大将の居室で、大将シスファンはまだ寝間着姿のまま広い窓の前に立ち、そこから見えるミストラの上空を睨んでいた。

既に手の影は掻き消え、窓の外には何事も無かったかのような深い夜が広がっている。

イエンセンが声をかける前に、シスファンは厳しい表情を浮かべた顔を向けた。

「指示はしたのか。」

「中央への確認と、全隊待機を。」

シスファンはひとまず頷いて、再び瞳を窓へと戻す。

「…王の顕現だ。我々の範疇を超えている。既にあの場での事は終わり、我々に出来る事はおそらく何も無いだろうよ。」

そう言うと寝間着の肩から軍服を羽織り、傍の長椅子に腰を降ろした。束の間考え込むように伏せた瞳を上げる。

「…北の再現だと思うか？」

シスファンの問いにイエンセンは黙る事で返答を保留する。丁度その時扉が慌しく叩かれ、兵が一人入室すると、二人の前で踵を打ち鳴らし緊張した面持ちで敬礼した。

「失礼します！ たった今、総将アスタロト公より、急使にて指令が届けられました。」

早口でそう告げると手にしていた書状をイエンセンに差し出す。イエンセンはいくつかに折り畳まれたそれを振るように張って開き、そこに書かれた数行の文字に素早く視線を走らせた。

その顔にさつと緊張が走る。

「早いな。公は何と？」

「いえ、我が方の急使に対する回答ではありませんが…内容はご指示を仰いだ事と隔たりはありませんな。オルセを陥し、サムワイル男爵を捕縛せよとの仰せです。」

オルセはサムワイル男爵の居城がある街の名だ。

「サムワイル？ ミストラについては？」

「ミストラについては、現時点での介入の必要なし、と。」

複雑な色を浮かべたイエンセンから書状を受け取り、目を通す。

イエンセンの言うとおり、書状には正規軍総将アスタロト本人の直筆で、一個中隊を以て可及的速やかにオルセを陥せ、と書かれていた。

「確かに閣下のお蹟だな。直々にという事は、王命か。」

シスファンは立ち上がると、引き締まった顔をイエンセンに向けた。

「準備が整い次第、中隊をオルセへ向けよ。包囲後一度開門勧告、

応答がなければそのまま陥とせ。朝日が上がる前に陥落させる。」

イエンセンが頷き、右腕を胸に当て敬礼してから退出する。それを見送り、シスファンは寝間着を脱ぎ捨て、軍服に袖を通す。

果たしてミストラの山中で何があったのか。第七軍がそれを確認する時間はない。

アスタロトはミストラへの関与を認めておらず、また仮に今、山中に兵を送っても、その場に近づく事は難しいだろう。その間に師団が現場の処理をしていくはずだ。

「剣士か？厄介な事だ。」

溜息を一つつき、シスファンは居室を出ると、自ら指揮を執るために執務室へと向かった。

## 第十七章

僅かな振動の後、光はあっけなく消失した。

呼吸をすら忘れ、その光景を見つめていたロットバルト達の前で、巨大な手は一度だけゆらりと揺れ、大気に溶けるように姿を消した。大気は穏やかに薙ぎ、そこに残ったのは、まるで何事も無かったかのような静寂だけだ。

暫らくの間、誰一人動く者はいなかった。

ふいに高く上がった飛竜の鳴き声に呪縛が解かれ、ロットバルトは大きく息を吐き、茫然と眼下を覗き込む。

谷は深く抉られ、全く様相を変えていた。その中心に倒れている影が見える。ロットバルトは飛竜の背を蹴った。

「ロットバルト！」

ヴィルトールの声を背に谷底に降り立つと、ロットバルトは倒れているレオアリスに駆け寄った。傍らに膝を付き、その顔を覗き込む。

呼吸が弱いながらも規則正しいリズムで刻まれているのを確認し、息を吐く。それからもう一度だけ、上空を仰いだ。

既にそこには、あの手の残滓すらない。

ロットバルトは外套を脱ぐとレオアリスの身体を包み、抱え上げた。ヴィルトールを乗せた飛竜が谷底に舞い降りる。

駆け寄ってきたヴィルトールもレオアリスの顔に視線を落して安堵の色を浮かべ、深い息を吐いて両手を膝に当てた。周囲を見回し、改めて茫然とした表情を浮かべる。

「凄まじいな……」

断ち切られたかのように、地層を覗かせた断面が四方に高く聳えている。削り取られたはずの土砂は跡形もない。

「これは当分の間、アリヤタの村を捜そうなんて無謀な輩は出ないだろうね。いっそのこと、アリヤタは全て滅びたと、そう言うか。」

飛竜の背の上にレオアリスを乗せると、ロツトバルトも頷き、上空に集まってきた飛竜達を見上げた。

旋回を続ける飛竜達の背に、アリヤタの白い身体が僅かに見え隠れしていた。

## 第十八章

夜が明け、空は次第に白み始めた。

太陽の姿はミストラ山脈の尾根に隠され、アリヤタの村があった斜面の中腹には陽光は当たらない。

中天までは背後の尾根が陽を遮り、西に僅かに傾けば、目の前に聳える深い谷が、落ちていく陽すら奪ってしまふ。

急峻な岩壁が連なり、ろくな作物は育たず、村へ下る谷の道は行き来する事も容易ではない。

その地をすら手放し、生き残ったアリヤタ族達は暁の光を避けるように、更に山脈の奥へと姿を消した。

だが、その先には生きる事すら難しい、今よりもっと過酷な地があるだけだ。

アリヤタ族の姿が朝靄の立ち込める木々の奥に消えた後も、レオアリスは一言も発しないまま、燻り続ける灰から立ち昇る細い煙を眺めていた。

昨夜の力の暴走は既にその上には形を止めていない。だが、普段の姿からは想像も付かない、他を寄せ付けない固い空気がその身の周りを包んでいた。

ロットバルトは暫らく離れた場所でその姿を眺めていたが、軽く息を吐いて歩み寄った。そろそろ現場の後処理も終わる。近付いてレオアリスの横顔に視線を注いだ。

予想に反して、その上にあるのは、悲しみでも、後悔でも、憎しみでもない。

だがそれら全てを確かに含みながら、そこにあるもの。

「怒って、おられるのですか。」

ロットバルトの問い掛けに、レオアリスは驚いたように瞳を上げた。今初めて、自分の感情に名前を付けられたかのように。

僅かに考え込んだ後、再び視線を森に向ける。

「判らない。…いや、そうだな。俺は、怒ってる。でも」

消されていく種族の火。

貧困に根差した絶えない苦しみと、それを食い物にする欲。

無知、傍観、様々な要素。

既に失われた 取り戻せないもの。

「何に対して怒ればいいのか、判らないな…」

## 第十九章

空を切り裂くように数十もの飛竜が旋回する。

紅玉のような鱗を持った飛竜達が高く飛び交う様は、灰色の重苦しい空を背景に紅い花卉が舞うようにも見えた。

「全く気に食わん。何故私があの小僧の後始末をしてやらねばならん？」

長い廊下の角から彼女の姿を認め、早足に近寄ってきたイエンセンを見るなり、シスファンは苛々と言い募った。城内の薄暗い廊下を足音高く歩きながら、まるで相手が目の前にいるかのように舌を打つ。

「王命では致し方ありませんまい。」

どちらの行為がとは言わず、シスファンの半歩後ろを早足で付き従いながら、その副将イエンセンはあくまで冷静に言葉を繋いだ。

「それに、何故我等が気付かなかったかと、そこを取り沙汰されれば言葉もない。というより引責問題ですな。」

改めて問題を考えれば、その点を指摘された場合言い逃れは利かない。首です首、と指で首を切る仕草を試してみせる副将を忌々しうに振り返り、シスファンは立ち止まった。

耳の辺りで揃えた真つすぐな黒髪を腹立たしげに打ち払う。

「それだ。くそ、サムワイルめ、何の他意も欲も無い振りをしてたかばりおって！ただでは済んですません！完全に間抜けだぞ、私は！」

「もう既にただでは済んでおりませんよ。貴方は一体どっちに怒ってらっしゃるんで？」

のんびりとした面に笑みを浮かべたイエンセンを再び睨み付け、シスファンは歩き出した。かなりの早足に苦笑しながら追いかける。

「全く、貴様は悠長だな！」

呆れ返って自分を睨みつけるシスファンを余裕に満ちた眼で眺め、イエンセンは一筋皺の刻まれた口元をにやりと歪めた。

「今度は私ですか。貴方は妙なところで熱くなりますな。」

「冷静だよ！腹の底が冷えて痛い程だ！」

イエンセンは白髪混じりの顎髭を回して辺りを一旦見直し、  
「と食えない笑みを浮かべる。」

「ま、そうですな。やる事と感情を分けられるのが貴方の良いところだと思えますよ。」

既に東方辺境軍の介入によりサムワイル男爵の城は落ちた。残った領兵団も領主の捕縛を知ると、激しい抵抗も見せずに降っている。辺りに燻る煙と、戦闘が終了した後の一種独特の昂揚感が城の外に満ちている。サムワイル男爵とその周辺の者達は牢に捕え、王都への送還を待つばかりだ。

「サムワイル卿を」

「卿はいらん。既に罪は確定している。覆るまいよ。」

現に倉庫からは流通経路に乗る前の術具が数十点押えられている。それが何か分かるだけに余計に苦い。

「ではサムワイルを王都に送る前に、彼とその周辺、それから押収物を少々検分したいとの申し出があるんですが。」

シスファンは訝しそうに細めた黒い瞳を副将に向けた。王都からこんなにも早く司法官が到着するものだろうか。

正規將軍アスタロトから命を受けたのは深夜の事で、今は正午を僅かに回ったばかりだ。

「…誰だ？」

「近衛師団第一大隊の参謀殿です。先程ミストラから到着したばかりで。」

シスファンは苦虫を噛み潰したように顔を歪め、どこにいても嫌でも耳に入るその名を口の中で呟いた。正確には、その家名を。

「めんどくさい奴が来たな。断るに断れん。」

「王都の姪っこの話じゃ、いい男だそうですね。」

「顔で仕事が出るか。」

「有難いお言葉で。」

冗談めかしたイエンセンの顔を呆れた眼で眺めたが、シスファンはすぐに考え込むように眉を寄せた。再び、今度ははっきりとその名を口にする。

「ヴェルナーか……。侯爵は彼の後ろに付くおつもりなのか？」

レオアリスは現在政治的に強力な後継者を持たない。王の御前試合を制し、最高位の剣士と謳われ、若くして近衛師団の大將位にあつたとしてもだ。

通常ならばよしみを結びたい者達が列をなしてもおかしくない立場でありながら、そうした状況下にはない。

それは非常に危うい一面を持っている為だ。

レオアリスが剣士であるという、その事が。

口にする事は憚られるものの、内政の副長官であるヴェルナー侯爵がそれを理解していない訳ではないだろう。

これまでシスファンはレオアリスと直接の面識は持っていないが、口さがない連中が口にする、若すぎるだの出自だのとそうした事は、実際は気にしてはいない。先ほど後始末云々と言いはしたが、結局腹を立てているのは半ば、気付かなかつた自分に対してだ。王都に帰還した際、軍議などで眼にするあの少年は、若い割に意外としつかりしていそうだと、そんな感想を持ってはいた。

だが古くから師団にあるグランスレイは少なからず知っている。グランスレイが副將に身を置いている位なのだから、それなりの根拠はあるのだろう。

肩入れする程の理由もないが、どんな相手か、一度は話してみたとも思っている。

「…許可しよう。どこにいる？」

二、三確認したい事もある。

昨夜ミストラで何があつたのか。

ミストラの尾根を覆うように渦巻いた、強大な力。

数十里離れたこのサランバードにまで伝わったあの異様。

王の顕現。

その直前にもうひとつ、尾根を照らした光を、衛兵が確認している。

監視所からの報告は要領を得なかった。その場に近付けた者がいないからだ。師団の警戒が厳しかった事もあるが、物理的な圧力が壁のように近づくのを阻んでいた。

「貴方の執務室に通してますよ。あの部屋はしかしければしくて好きませんねえ。サムワイルも趣味が悪い。」

「そう思うならあんな部屋に通すな。私の趣味だと思われたら寝覚めが悪い。…そうだな、装飾は後で剥がして売り払え。街の補修費はなるだろう。」

「では、中央に一度打診しましょう。」

頷いてつい勢い良く扉を開け、シスファンは眉をしかめた。客人在る事を忘れていたのだ。

「失敬。貴侯が、師団第一大隊の？」

部屋の中央に立っていた男がシスファンに身体を向け、優雅に一礼する。

「お初にお目にかかります。近衛師団第一大隊一等参謀官、ヴェルナーと申します。」

思わず呆然とその姿を眺めるシスファンに、ロットバルトは柔らかい笑みを浮かべた。金の髪と蒼い瞳の見事な造形の姿は、ごてごてと飾り付けられた室内の装飾に溶け込むのを拒むように見える。

さすが筆頭侯爵家は造りも違うと妙な感心を抱きつつ、シスファンはつい言い訳めいた事を口にした。

「…ああ、とんでもない部屋に通したが、この部屋が一番広いものでな。」

「まあ崩してしまえば趣味の悪さはばれない。復興の足しにはなるでしょうね。」

「ほお…」

貴族にしては現実的な発想だと、改めて目の前の男をしげしげと眺める。

この男が王立学術院にいた頃、院きつての秀才と呼び声も高かった。いずれ内務に進むものと目されていたはずだ。

（それが、第一大隊か。）

ロットバルトは、自分を眺めるシスファンの様子を気にする素振りを見せずに用件を切り出した。

「取り込んでおられるところを恐縮ですが、少々ご助力をお願いしたい。既にお聞き及んでおられる通り、今回の件は時を置かず王都での裁判が行われるでしょう。必然的に我々の大將も法廷に立つ事になります。その為の幾つかの確認をさせて頂きたい。」

目的も理由も全て先に述べられて、シスファンは開きかけた口を甲斐無く閉ざした。

「……いいだろう、必要なだけ見ていくといい。今案内を付けよう。」  
「ありがとうございます。」

イエンセンが扉を振り返り声を上げると、すぐに若い兵が顔を出す。兵はイエンセンから手短に指示を与えられて頷き、緊張気味にロットバルトに一礼して扉を示した。

「こちらへ。ご案内させていただきます。」

兵の後に付いて歩きだしかけたロットバルトを、シスファンは何気ない素振り呼び止めた。

「一つ、私も確認したい事があるのだが、いいか。」

「何なりと。」

シスファンは数瞬、自分に向けられた蒼い瞳を計るように覗き込み、口を開いた。

「昨夜、王の顕現があつたな。」

問いかける言葉には矢のような鋭さがあつたが、師団参謀官はまるで表情も変えずに頷いただけだ。

「何故か、あの場にいた貴侯ならば知っているだろう。」

「残念ながら、王のご意向は我々などには計り知れないものでしょう。」

ロットバルトの口元に柔らかく浮かんだ笑みを、シスファンは暫

く瞳を細めて眺めていたが、すぐにそれを外し肩を竦めた。  
「いいだろう。」

一礼して退出するその背に声を掛ける。

「貴侯の大將によしなに。王都でお会いしよう。」

「承知いたしました。」

扉が閉ざされると、シスファンはイエンセンを振り返った。

「前言撤回だ。向かい合っていて気分が良かったぞ。顔で仕事するのも有りだな。」

イエンセンは声を立てて笑ったが、すぐにその表情を引き締めた。  
「もう少し詳しく問い質してみますか。」

「師団中將の上、家も厄介だ。迂闊に詰問もできん。それに、あの手は口を開かないだろうよ。」

辺境軍はミストラを越えて侵入しようとする勢力、いわゆる有事に備えて配備されている軍だ。対応すべき事があれば、王都は必ず何か言ってくるだろう。

王の下命がないのならば事もなし、と、そういう事だ。

シスファンは執務機の奥に腰かけると、机の上に置かれていた悪趣味な金の文鎮を取り上げ、暫く眺めてから抽斗に放り込んだ。

「接收状況はどこまで進んだ？」

「一両日もあれば終了するでしょう。」

「では、我々も王都に向う準備をしておこう。」

すぐにでも王都からの召喚があるだろう。

部屋の西側に張り出した広い窓に視線を投げ、遙か先にある王都を見透かす。

（王都は遠すぎる。）

辺境にあつては自然情報が伝わるのは遅くなる。今回の件が何を中心にどう動いていたのか。今回は完全に取り残されたような状況だが、いざ対応しなければならぬときに知らぬでは済まされない。

（剣士か。）

あの剣士に一度会っておく必要がある。

それは今後、一つの懸案に対する道筋を立てる上で、重要な事だ  
った。

## 第二十章

法廷内に判決の割鐘の音が響く。

サムワイル男爵の関与が露見した今回の法廷は、爵位の剥奪と領地の没収、更にサムワイル男爵以下、警備隊正副長の死罪、小隊責任者の死罪或いは投獄と、厳しい判決に終わった。

密売への関与が正規東方辺境軍にまで及んでいなかった事だけが、関係者の胸を撫で下ろさせた。

被告席に連座していた者達が或いは弁明の声を上げ、或いは絶望に頂垂れる中、末席にいたジウスが立ち上がり、レオアリス達の座る席に一度顔を向けて頭を下げると、そのまま両脇を司法兵に抑えられるようにして退出した。

死罪は免れたものの投獄は余儀なく、数年を監獄で奪われる事になる。

レオアリスはその姿が法廷の扉に消えるまで見送ってから、立ち上がった。

判決が下るまで約二十日間を要したが、異例の早さと言えるだろう。

それは内容の深刻さを伝えるものでもある。

また、アリヤタの密売に関わった全ての者を把握し、法的な処罰が下されるには、更に綿密な調査と日数とを必要とする。

だがその先は、司法の役割であり、近衛師団の管轄ではない。

漸く裁判を終えた事への解放感などまるでなく、レオアリスは一度法廷内を見渡した。自分がここに立っている事に違和感を覚える。彼等と自分の、何が違う？ただ生まれた場所だけの差なのではないか。

自分がまるつきり彼等と違つと、そう言い切れる者は、本当はいない。

「上将、参りましょう。」

ロツトバルトの柔らかい、だがレオアリスを引き戻す声に瞳を向けた。そこには、既に先程の色はない。

重苦しく立ち込めた空気を少しでも薄めようとするように、午後の陽射しが天井部分に設けられた細長い窓から注いでいる。

「色々、助かった。」

裁判に必要な書類や証拠類、想定質問や答弁の下原稿、ロツトバルトの用意したそれらが、進行を容易にしてくれた。

「やっぱお前を同行させて正解だったな。」

現場を見ていなければ、この優秀な参謀官であつても、まずは事実整理から始める必要がある、尚幾ばくかの時間を要しただろう。

軽快な笑みを浮かべたレオアリスを、ロツトバルトも笑みを刷いて眺める。

「それが本来の私の役割ですからね。いくらでも。」

「冗談。裁判なんてめんどくさくて、もうやりたくねえ。」

「上将。」

「ああ、行こう。」

グランスレイが再び促して扉へと足を向けた時、ふいに快活な声がかかった。

「無事済んで重畳。いや、法廷なんぞには半月でも拘束されるのは辛いな。」

そう言いながら歩み寄つたのは正規東方第七軍大将レベッカ・シスファンとその副将イエンセンだ。耳の辺りで揃えた黒い髪と釣り上がった黒い瞳。

シスファンは黒い瞳をレオアリスの同じ色のそれを覗き込むように向け、それから右手を差し出した。

「幾度か軍議の席でお見かけはしているが、改まって挨拶をさせて頂くのは初めてだな。東方第七軍のシスファンだ。」

「師団第一大隊のレオアリスです。本来ならこちらからご挨拶申し上げますところを、失礼致しました。」

差し出された手を握ると、思った以上の力が握り返す。覗き込ん

でいた瞳に笑みを浮かべ、シスファンは漸く手を放した。

「意外とお固いな。大将同士、それに私はグランスレイとは旧知だ、そう畏まる必要もない。」

レオアリスがグランスレイを振り返るとグランスレイは彼に頷いて見せ、改めてシスファンに向き直った。左腕を胸に敬礼するグランスレイにシスファンは笑みを浮かべる。

「久しいな、グランスレイ。調子はどうだ？」

「お陰様で。シスファン大将におかれましてもご健勝のご様子で何よりです。」

「お前も相変わらず固いな。大将殿はお前の影響か？…参謀殿には先日お会いした。役に立ったようだな。」

ロットバルトもまた敬礼を施し、先日の礼を述べる。シスファンはレオアリスと向かい合うと、再び瞳を合わせた。

「アリヤタの件は本来我々第七軍の感知してしかるべきものだった。恐縮の至りだが、貴侯ら師団には手数をかけたな。」

「いや。所管内をお騒がせしました。」

秘密裏に事を運ぶ必要があったとはいえ、レオアリスとしても正規軍の所管内に無断で軍を進めた事を気にしてはいた。しかしシスファンは特に気にしたふうもなく頷いた。

「まあ正直に言えば、初めはいい気はしなかったが、事が事だけに仕方ない。気にするほど私も狭量ではないさ。」

そのもの言いに僅かに笑ったレオアリスを眺め、シスファンは声を落とした。

「…現地を見た。すっかり削り取られていたが、あれは貴侯か？」

ロットバルトが口を開こうとしたのを片手を上げて制し、レオアリスが頷く。だが自分にすらはつきりと原因の判っていない事に答えようもなく、口を開くべきかどうか束の間逡巡した。

「…見事だった、あれは。尤も王もお手を加えられたようだが。」

シスファンは冗談めかして笑ったが、瞳の奥には別の色がちらりと過る。

「剣士つてのは想像を越えている。き合うのはいつ以来かな。」

そういえば、剣士と向

「シスファン大将。」

グランスレイの警戒を帯びた響きに笑う。レオアリスもグランスレイを見たが、グランスレイはシスファンに厳しい顔を向けたままだ。

「そう構えるな。」

そう言うと、それまで黙って控えていたイエンセンが時を告げたのを機に、退意を述べる。

「アリヤタに関しては、今後一層警戒を強める。…もう、取り返しはつかないがな。愚かな事だ。」

誰にともなくそう呟き、シスファンはレオアリス達に背を向けた。後を追うイエンセンがちらりとレオアリス達に目を向け、声を潜める。

「剣呑な事をおっしゃいますな。」

「少し反応が見たかったのさ。…三者三様だな。」

グランスレイは警戒と咎める色を見せ、ロットバルトは状況を計るようだった。肝心のレオアリスは、シスファンが想定していたような反応を見せなかった。

「辺境に引っ込んでいるのは幸いかどうか。」

「対峙したいとは夢にも思いませんがね。」

「私もだ。あのミストラを見たら尚更な。」

シスファンは苦笑とも自嘲ともつかないまま、小さく笑った。

シスファンが戻るのを束の間見送って、レオアリスは踵を返し、重厚な扉をくぐり廊下へと出た。

法廷の廊下には傍聴を終えた幾人かが、まだ其処ここに立ち止まり、抑えた声で今回の判決に対しての論議が交わされている。

三人がその脇を抜け、廊下の右手にある階段へ向おうとした時、騒めきに紛れて小さな囁きが漏れた。

「お咎め無しか。」

刺を含んだ響きだ。

「僅かに十体しか救えなかったのは、明らかな失態だろう。」

聞こえよがしの言葉に、レオアリスは微かな苦い笑みを口元に浮かべたが、特に何も言わず階段へ向う。

彼等のようにレオアリスを快く思っていない者達も、少なからず存在する。それは今に始まったことでもない。若過ぎるといふ事と、出身が平民であるというその二点が、序列に拘る者達にとって、不満の糸口ともなっていた。

また師団大将の地位は子爵位に相当する。レオアリスより王都に長く籍を置き、未だ望む地位を得られず中間位に留まっている者ほど、それはより疎ましく感じられる。

そしてその地位にありながら、有力者達との距離が近くないことも、その感情に拍車を掛けていた。囁きはそれら内政官達のものだ。「所詮剣士には、不得意な分野だよ。」

「戦場しか向かないのさ。」

決して直接は向けられない、だが嘲りを含んだ声に、グランスレイは敵しい瞳を向けた。内政官達はグランスレイの刺すような視線に怯みはしたものの、歩みを止めないレオアリスの後姿に不満と侮蔑の入り混じった色を浮かべる。

「これは、グランスレイ殿。何か言いたい事でもおありか。貴殿の大將殿は、議論するつもりもないようだが。」

「剣士には、議論は不得手ですか。」

内政官達の地位は、レオアリスよりも低い。本来ならばそうした物言いは、許されるものではない。

（上將が咎めないのをいい事に…。）

怒りを込めて口を開きかけたグランスレイの肩を押さえ、ロットバルトが彼等に向き直った。秀麗な頬に穏やかな笑みを浮かべる。

「議論がお望みであれば、正式にお申し出頂ければ、場を設定致しますし。無論文書でも構いませんが。上將は必要の無い議論はお好みではない。」

「ヴェ…、ヴェルナー殿。」

「い、いや、我々は何もそこまで…」

途端に恐縮し、冷や汗を浮かべて首を振る彼等を眺め、ロットバルトは冷笑を隠して丁寧に一礼した。

どうせ正式な申し出などして来る事も無いだろう。公式の場での発言をする気も無い輩を、レオアリスが相手にする必要は全くない。そのまま視線すら向けず、ロットバルトとグランスレイはレオアリスの後を追った。

「済まないな、ロットバルト。」

グランスレイは不満を押し隠せないままに溜息をついた。その顔を眺めてロットバルトは小さく笑う。本当なら大声で叱責でもしたかったと言わんばかりだ。

「まあ、ああした出自ばかりに拘る輩は、彼等の重視するもので脅すのが一番容易い。その点で私は都合がいいですね。」

公式な発言記録が残されては具合が悪いという事以外に、彼等が狼狽えた要因の多くは、侯爵家の筆頭を務めるヴェルナーの家柄にある。ヴェルナー侯爵は彼等の所属する内政官房の副長官でもあった。

ロットバルト自身が侯爵位にある訳でもないのに、あの恐縮のしようはご苦労な事だと思うが、それで口を噤む程度なら大して問題にはならない。

（　　だが、上將に必要なのは、その形骸だ。）

ただ王に仕える事を望むだけには、王都は厳しい場所だ。

實力を見せても納得しない者達を黙らせるのは、それが形骸と判っていたとしても、強力な、そして明確な後ろ盾を得る事が一番の近道になる。

階段の一番下に立ち、自分達の降りてくるのを待つように見上げたレオアリスの姿に、二人はそれぞれの視線を向けた。

「…ああした輩が多いのは、困った事だ。」

「そうですか？私としては、立場の有効利用のし甲斐があって、少

々楽しんでますよ。」

「グランスレイは僅かに呆れた眼を向けたが、すぐに苦笑に変えて、先に階段を下りだした。」

ロットバルトは一度法廷の扉を振り返る。丁度シスファンが出てくるところだった。一瞬だけ合った視線をすぐに離し、ロットバルトもまた階段を下る。

（読めないな。）

シスファンが何を仕掛けようとしたのか。一見好意的な態度と見えなくもないが、判断には少し早い。また彼女の言葉に対して警戒に似た色を孕んだグランスレイの声。

想定以上にレオアリスの立場は不安定なものようだ、ロットバルトは改めて階下に立つ上官に視線を移した。

二人が追い付いたのを確認し、レオアリスは再び歩き出す。階段下の広間の正面にある扉を抜け、陽射しの降り注ぐ屋外に出ると、一度眩しそうに太陽を見上げた。

## 第二十一章（一）

その二日後、ロットバルトは再び、旅装を整えて中庭に向かった。夜が明けたばかりだというのに、既に中庭には先日と同じく飛竜が二頭、待機している。先日とは違う銀翼のそれは、レオアリスの乗騎だ。

その傍らにレオアリスの姿があった。手を伸ばし、嬉しそうに顔をすり寄せる飛竜の長い首を撫でている。

隣で翼を震わせている黒竜は師団兵の乗騎だ。二頭の飛竜の背には、幾つかの木箱が括りつけられていた。

レオアリスが自分の乗騎を用意しているということは、今回は特に立場を秘しての行動ではないようだ。ロットバルトは口元に笑みを刷いた。

「…今度はどちらに？」

「お前、前回の教訓を生かして今度は服を変えようとか、そういう事しないのか。」

相変わらず、簡素ながらも一目で上質と判る旅装に、レオアリスは呆れた顔を向けた。

「生憎とこうしたもののしか、似合わないもので。」

「…そこまで言われると、いっそ気分がいいよなあ。」

乾いた笑いを洩らし、持っていた飛竜の手綱をロットバルトへ投げる。

「ま、いいや。ちょっと付き合え。」

そう言うのとさっさと飛竜の背に飛び乗り、飛翔させる。

「どこに…」

慌てて天を振り仰いだものの、既にレオアリスの乗騎は上空高くに位置している。ロットバルトは諦めて飛竜の背に跨った。

ロットバルトが上がってくるのを待ち、レオアリスは改めて口を開いた。

「王からの御下賜を届ける。」

事も無げに言うが、王の使者だというのに全くの平服とは、さすがに使者が近衛師団の将校であったとしても、相手方に失礼にあたるのではないだろうか。ロットバルトの表情を見て取り、レオアリスは軽く笑った。

「気にするな、届けるのは俺の故郷だ。まあちよつと遠いが、今からなら夕刻までには向こうに着くだろう。」

そう言うって驚くロットバルトを余所に騎首を北に巡らせる。

ほどなく王都が眼下から消え去り、次第に家や畑も疎らになる。それに反比例するように、足元には鬱蒼とした森が広がりはだした。

果てしない森の中に、時折、街道や街や村、川の流れが覗く。

「何をお届けになるのか、伺ってもよろしいですか。」

「書物だよ、最新版。」

答えはないかと思っただが、レオアリスは嬉しそうに眼を輝かせ、騎上からロットバルトを振り返った。

「書物？」

「昔、王と長老達との間で、何か取り決めをしたらしくてな。毎年一回届けられた。色んなのがあつたぜ、魔法書とか、歴史、地理、数学。物心付いたときからそれが結構楽しみで、特に冬に雪で村が閉ざされてる間は何度も読み返してた。そうしてりゃ、腹が減つてるのも忘れるし。爺さん達が貴重な書物に触つても怒らなかつたのは、そういう理由があつたんだろつな。」

可笑しそうに声を上げて笑う。王との間にそんな関わりがあつた事に驚きを覚えて、ロットバルトはレオアリスの顔を眺めた。

それが、レオアリスの王に対する憧憬の理由だろうか。

「俺が王都に出るからは、こうして毎年自分で持つていつてる。ちなみに扱い、休暇だから。」

「私も、ですか。」

「出しといた。」

悪びれもせず、当然のようにそう言うと、レオアリスは手綱を引き、飛竜の速度を早める。異議を唱えるのを諦め、ロットバルトも乗騎の速度を上げた。

王都を出たのはまだようやく太陽が上がり始めていた頃だったが、今はゆっくりと西に傾き、黄昏に近い色を放っている。

眼下に広がっていた深い森が一段と濃さを増し、辺境に近づいたことを感じられるようになった頃、レオアリスは騎首を地上に向けた。

その前方にぼつんと、眠ったように静かな村がある。

古びた小さな家が点在するその先には、幾つかの低い山と、今通り過ぎてきたよりも更に深い森が広がっている。

視界の端が霞むほどの、行く者を拒むような鬱蒼とした大森林。

北の辺境に横たわる、黒森、ヴィジャだ。

( 。。。 )

飛竜は村の中央に位置する広場に、ゆっくりと弧を描きながら下降した。

レオアリスの故郷。

近衛師団の将校が出たというのに、そこは栄える様子も無く、ただひっそりと佇んでいた。

「俺が財を送っても、何にも変えようとしななんだ、こここのじじいどもは。だから無駄な事を言うのはもう止めた。」

その言葉ほど、声に不満の色は無い。

だが貧しい佇まいながら、ミストラのあの街のような荒れ果てた空気がそこには無かった。

飛竜が降下したのを見て取ったのだろう、数人が家の中から顔を出し、二人の方へやってくる。レオアリスは広場の脇に立つ木の幹

に飛竜を繋ぐと、その背に括っていた箱を担ぎ上げた。

「お持ちしましょう。」

延ばされたロットバルトの手を断る。

「気にするな。お前休暇中だろ。」

に、と笑みを浮かべてロットバルトを見上げ、出迎えに来た村人達の方へ足を向ける。

「…お陰さまで。」

苦笑を禁じ得ないまま、改めて近付いてきた村人達に眼を向け、ロットバルトはその姿に眼を見開いた。

鳥の頭と、黒い翼を持った姿。

その姿はレオアリスとは、似ても似つかない。

彼等は表情の見えにくいその顔の上に温かい笑みを浮かべ、代わる代わるレオアリスの身体に腕を回して抱き締め、その背を数度叩いた。

一人の老人が自分よりも僅かに背の高いレオアリスを見上げ、皺枯れた深い声に嬉しそうな響きを籠めた。

「よく戻ったな。元気そうだなによりじゃ。」

「爺さんたちもな。まったく、相変わらずしけた生活してんなあ。」

年寄りなんだから、もっと贅沢しろよ。」

「子供が、偉そうな口を利くな。そちらの方は。」

少し離れた所に立っていたロットバルトに視線を向けると、レオアリスは声に心外そうな色を滲ませた。

「方はつて、こいつは俺の部下だよ。」

「第一大隊参謀本部付きの、ヴェルナーと申します。」

左腕を胸に充て一礼するロットバルトと目の前のレオアリスとを何度か見比べ、村人達はさも可笑しそうに笑った。

「お前よりも立派に見えるわ。ガキのくせに部下とはの。」

「歳は関係ねえだろ。」

「果たして旨く一軍を治められているのやら。さあ、こんな所で立ち話もなんだ。お入りください。ご覧のとおりのおばら家で、何も

持て成すものもないが。」

そう言つと老人は、広場のすぐ脇にある木の柱と土壁で出来た粗末な小屋に二人を手招く。まだ話し足りないだろう村人達に軽く手を振つて、レオアリスは小屋へ向かった。

## 第二十一章（二）

薄暗い室内にはうつすらと薬膏の臭いが漂っていた。真ん中に小さな囲炉裏があり、部屋の四方の壁を薬草やロツトバルトには何に使うのかさえ判らない呪具、術具、膨大な量の書物が埋め尽くしている。

レオアリスは担いでいた箱を、壁際に下ろした。

「仕舞う所あるのか？これ。誰か他のどこに置いてこようか。」

「いや、まず目録を付ける。そのままでよい。」

「ま、暫らくなら俺の部屋に置いてもいいいぜ。」

所狭しと積みあがった書物や木箱を呆れたように眺め、部屋の奥を示す。その壁には目の粗い麻の布が一枚、床まで垂れ下がっている。

「お前の部屋はとつくに倉庫にしてしまったわ。」

その言葉に、レオアリスは奥の入り口に扉代わりに掛かっていた布をバサリとめくり、部屋を覗き込んだ。すぐに顰め面で顔を出す。「ひでえ…。足の踏み場もねえじゃんか。ふつー取っとけよ、そのまま。」

「めつたに帰ってこない者の事など二の次じゃ。」

「気持ちだよ、気持ち。久々に帰ってみてこの扱いじゃ、帰り甲斐がないだろ。」

二人の遣り取りに口元を歪めながら、ロツトバルトは改めてぐりりと部屋を見渡した。かつてはレオアリスが生活した家。王都の住居からは想像もつかない。

王都がそぐわれない訳ではないが、この中にいるレオアリスはひどく自然だった。

レオアリスは仕方無さそうに肩を竦め、ロツトバルトに囲炉裏の脇に座るように勧めると、自らは何か壁の一角を荒らした。

「何だよ、このウチ。来客用の茶もねえのか。…しょうがねえなあ。」

ちよつと採ってくる。ロットバルト、悪いけどここで待つてるよ。」

「採って…、上将、そのような事は…」

「いーからいーから。座つとけつて。」

慌てて立ち上がるロットバルトの言葉など気にした様子もなく、

レオアリスはさっさと扉を開けた。

「待ちなさい。」

出て行こうとしたレオアリスを呼び止めると、長老は部屋の隅から葦で編んだ籠を選び、レオアリスの目の前に差し出した。

「『眠りの根』が不足しておるでの。」

「あのなあ…。つたく。」

呆れながらも籠を受け取り、肩に担ぐようにして小屋を出る。上官に動かせて自分は座っているなど、さすがに出来る訳がない。

溜息を吐いて後を追おうとしたロットバルトの前に、もう一つ籠が差し出された。

思わず手を伸ばして受け取ってから、籠と長老とを見比べる。

「…この籠一杯で、よろしいんですか。」

「間違いの無いようにな。」

乾いた笑みを浮かべ、了承の意味で頭を軽く下げる。

姿は違っても、やはり良く似ている。貧しい中で育ちながら、レオアリスの中に荒んだ暗さが無いのは、この村の空気と、この育て親のお陰なのだろう。

小屋を出て左右に眼を向けると、レオアリスは左手の山へと続く坂道を登っていくところだった。呼びかける声に気付いて振り返る。

「何だ。座つてろつて言ったのに。」

「そういう訳にも行かないでしょう。まあ、私にも仕事をいただきましたし。」

ロットバルトが手にした籠を持ち上げて見せると、レオアリスは声を立てて笑った。

「人使い荒えなあ。悪い悪い。それにしてもお前、薬草なんて見分け付くのか?」

「書物で大体は学びましたが…自生のものを見た事はありませんね。」

調合方法やそれによって作りだされる効果の大まかな知識は持っているが、それらが今自分が登っているような鬱蒼とした山の斜面に生えているところなど、想像した事もなかった。

ロットバルトの言葉に、レオアリスは感心しているのか呆れているのか、どちらともつかない眼を向ける。

「へえ。まあ、そこらへんに生えてるもん、適当に採ってけよ。」

「適当にと言われましても。」

「どうせ何でも使える。全く使えないものなんて無いんだ。何持つて行っても、じいさんは喜ぶぜ。」

そう言われて、ロットバルトは辺りの下生えを見回した。ロットバルトの目には、ただの雑草としか映らないものが薬や何かになるという、その事に軽い驚きを覚える。

暫らく登っていく内に、木々が切れ、小さい空き地が開ける。

一方が崖となつて山の中腹に突き出したそこから、村が一望できる。

疎らに散つた十数軒の粗末な小屋と、それを囲むように流れる細い川。その先には、先程飛竜で越えてきた森が広がっている。細い道が一本、その森の中に潜り込むように王都の方角へ向かつて延びているが、そこを辿ってくる者はあまり多くは無いのだろう。

外界から隔絶されたような村。

冬は長く、一年の半分を雪の中に閉じ込める。

足を止め、その光景を見下ろしているレオアリスの横顔を見つめる。ここで暮らしている間、どんな想いでこの光景を見ていたのだろう。

「…貴方と、この村の方々は…。」

口に出してしまつてから、ロットバルトは後悔の念を覚えた。だが、レオアリスは気にしたふうも無く、一度振り返ると、村を見下ろす位置に座り込む。

「ああ。言っただけでなかったわけ。まあ見てのとおり俺の種族じゃない。と言って、俺の種がどこにいるかなんて、聞かれても知らないけどな。」

あっさりと言っただけで告げられ、尋ねたロットバルトの方が当惑して、レオアリスを眺めた。

「探そうとは……」

「そうだな。…その気が無かったとは言え切れないが、あまり重要な事じゃなかった。自分と爺さんたちの姿が違うのは判ってたけど、それでどうこうって訳でもなかったし。」

まあ、探して、どこにもいないなんて分かるのが、嫌だったのも、あつたかもな。」

そう言つと暫く黙っていたが、ふいに背後に連なつた山の尾根を指差す。

「この先の森の、ずっと奥に、もうとっくに滅びた村がある。」

示された先は尾根に遮られて見る事は出来ないが、飛竜の上から見たとき、黒森が広がっていた方角だ。

「ガキの頃、一度だけそこに連れられて行って、廃墟の前で爺さんたちが何かを祈るのを、訳も分からず見てた。…そこかもしれないし、そうじゃないかもしれない。」

もしかしたらアリアヤタ族と同じような理由で、滅びた村なのかもしれないと、ロットバルトは心の中で思う。

術具として乱獲される種族。その使用を頑なに禁じた村。

あの時の、力の暴走。

単なる推測に過ぎないが。

レオアリスは何かを見透かすように漆黒の瞳をその方角へ向けたまま、首から下げた飾りを右手に握り込んでいる。

「俺にも関わりが深い。」

「思うところがある。」

「俺は怒ってる。でも、何に対して怒ればいいのか、判らないけどな。」

あの暴走の理由は、自分でも結局分かっていないのだと、レオアリスは言っていた。

突如現れ、その暴走を止めた王の手。

王は何かを知っているのだろうか。

王都に戻ってすぐ、レオアリスは報告の為に王城に上がったが、師団に戻ってきた時のレオアリスの表情には、これといった変化は見られなかった。

ロツトバルトもヴィルトールも、敢えて尋ねる事はしなかった。

レオアリスがその事を考えているのか、懐かしそうに村を眺めるその横顔からは窺い知る事はできない。

その内、レオアリスは服に付いた草を払って立ち上がった。

「さてと、さつさと籠を満杯にして帰ろうぜ。このまんまじゃ、いつまで経っても茶にすらありつけない。」

籠を持ち上げてみせ、背後の木々の間を指差す。

「かなりでかい籠を持たせられたから、結構時間が掛かるぜ。」

「承知しました。」

敢えて真面目くさって答えると、レオアリスは可笑しそうに笑った。

## 終章

長身を黒衣に包んだ男は、自分の周りに膝を付いた村人達に、片腕に抱えていた布の包みを差し出した。

鳥の頭を持った村人達が手を伸ばし、宝物を抱えるようにそれを受け取る。

覗き込んだその中には、生まれて間もない赤子が包まれていた。

黒い瞳が、泣きもせずに見上げて顔を上げる。

「故郷から離すのも忍びない。そなた達に託していこう。その対価として、年に一度、望みの物を贈ろう。金でも財宝でも、何なりと言うがいい。」

「特に必要なものではありません。彼らの友として、この子は我らが喜んで育てましょう。」

慈しむように向けられる幾つもの視線に、赤子が笑う。

赤子を抱えていた老人が懐から小さな青い石の飾りの付いた鎖を取り出し、小さな手に握らせる。赤子は嬉しそうに声をあげ、それをしっかりと握り締めた。

老人が、思い付いたように顔を上げる。

「お言葉に甘えさせていただくのなら。」

「何だ。」

「書物を、頂きたい。この辺境の村では、知識は年々古くなっていくばかり。この子が成長して外へ出た時に、困らないほどの知識を身に付けさせたいのです。」

男は面白そうな笑みをその頬に浮かべた。

「良かるう。毎年この日に届けさせよう。」

赤子の笑い声に男が黄金の眼を細める。手を伸ばし、その頭を撫ぜた。

「面白い赤子だ。一族の中で、最も高い能力を受け継いでいる。成長し、もし望むなら、私の許に来させるといい。」

村人達は男に向って、ただ静かに頭を下げた。

「名前がいるな。」

もう一度、男が赤子を腕に抱え上げる。

青い石が、明け方の光を弾いた。

「名は　　。」

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5880d/>

---

王の剣士2「絶滅種」

2009年3月24日10時57分発行